193.6-Se19ウ
1200500728713
1936
19

ヨハネ
しへたつの
福音書

始

193.5
SE19

しへたつのネハヨ

左近義弼 譯

東京

920
61

啓上

一　未熟ながらも、辭書や文典との首引で、而も原語の意味を明にし、福音記者の語調を強く其儘に映り出るやうにと努めましたが、何分にも、原文の希臘語は勿論のこと、和文や漢學の素養の甚だ乏しき自分、爲に、折角、寫した虎が猫に化けてるのを、まづ第一に、お詫びせねばならぬのを悲みます。

二　希伯來名のイエホオシュウア、イエホオシュア、イエェシュウアが、イエスウスと成り、イエスと成り、耶蘇と成り、またマァシィア、メシィアが、クリストスと成り、キリストと成り、基督と成り、合して耶蘇基督と成り、遂にエホバ神學に基ける猶太教の變名とも思はるる耶蘇教とも基督教とも成り果ててるのであります。而して既に永い間、襲用された、この耶、基の教名は、今では殆ど萬古不易、とても動かすことの出來ぬ程に成つて居りますが、併し、元來、ホレブ一角の一小山神エホバのみを崇め、猶太一派の獨善排他的神學に基ける、歐米一流の舶來基督教では、とても、全智全能、至聖至愛の父なる神を、明に知ることも出來ず、その神の子の一人なるイエス　クリストの福音を、深く悟ることも出來ぬほどに、偏狹頑迷な信念が、この「耶蘇基督」と云ふ四文字にコビリ附いてるの

で、不肖ながらも私は、從來の四文字を「彌崇貴德」の四文字に代へ、同時に、聊なりとも、この超凡特異な一人の神の子イエス　クリストの御性格を、この「彌崇貴德」の新文字に映出把握したいのですから、爰に、讀者諸君の御理解を偏に願ひ上げます。

三　さて、譯文中、今一つ、讀者諸君に、奇異な感を抱かせはせぬかと案じられるのは「我！　我は」「汝！　汝は」など、同じ代名詞を繰返してあることです。全體、原語では動詞の變化次第で、其儘、自他の人稱も、數の單複も一目瞭然ですから、前に代名詞を加へる必要は無いのですが、ただその强調を表す爲に、わざわざ、代名詞が附加へられてあるやうですから、たとひ、スラスラと流暢に讀み流されなくても、一言一句、詩歌の積りで、玄米飯のやうにゆつくり、よく嚙締めて下さい、粕の白米飯の走り讀み、グイ呑みでは、よく味が判りませぬ。

四　次に、譯文の見分け方に御注意を願ひます。

（ア）邦語の名詞には、所謂「冠詞」がありませぬから、その原文の冠詞を表す爲には、その名詞の右の上方に、白い小丸（○）を附けてあります。例へば、猶太人の如くにです。

（イ）名詞の複數を現すには「諸の人、諸人、人々、人達、人等、人ら」などでは、語呂の上からでも、一寸映りの悪い場合には、その名詞の右の下方に、黑い小丸（•）を附けてあります。例へば「此らの人々」の代りに、「此らの人」とし、又、その人々に、冠詞があれば、「此らの人」としてあります。

（ウ）神や神の子の聖名は、ゴヂツクで、區別してあります。

（エ）個有名詞以外にも、判明の便を慮りて、カタカナを用ひてる所もあります。

（オ）男性「彼」に對し、女性「彼女（カノ）」、卽ち、「カレ、カメ」の簡潔を採りました。

（カ）ドクサゾオの從來譯「榮光に歸する」を「サカヤカス」と致しました。

五　動詞の時制。

（ア）現在（プレゼント）ならば「彼　爲す」とか、或は「彼　爲しつつあり」

（イ）未來（ヒウチユア）ならば「彼　爲しつつあらん」

（ウ）不定過去（エオリスト）ならば「彼　爲せり」ですが、併し「彼在れり」で、少々、感じの悪いやうな時には「彼　在りき」とか、或は「彼　在りけり」など、「…せり、…けり、…りき、…しぬ」などで、この不定過去の用法にあてはまります。併し、場合により一定せざることあるを御免下さい。

（エ）未完了（イムパフエクト）ならば「彼　爲しつつありたり」、「彼　爲しつつありたり」、「彼　爲し始めたり」などであり

（オ）完了（パフエクト）ならば「彼　爲したり」であり

（カ）大完了（プルパフエクト）ならば「彼　全く（とく、夙に、既に）爲したり」と譯出してあります。

六　動詞の語法。

（ア）直接法（インヂカチヴ）ならば「彼　爲す、彼　爲しつつあり（現）」「彼　爲しつつあらん（未）」「彼　爲せり（不定）」「彼　爲しつつありたり、彼　爲し始めたり（未完）」「彼　爲したり（完）」

「彼　全く爲したり（大完）」などです。

（イ）接續法ならば「彼　爲さば、彼　爲しつつあらば」或は又、目的を含める場合には「彼　爲さめ、彼　爲しつつあらめ、彼　爲さばやな、彼　爲せよかし」など

（ウ）不定法ならば「爲すべく、爲すために」であり、而も、この不定法動詞の主題は、普通の主格でなくて、目的格であります。

（エ）以上の諸點を含みおいて、原文（ココのはスウタア撰）に照合はして、讀んで下されば、誰でも、早速、一語半句をも取落さずに、希臘原文の直讀が出來ます。

私は體格も容貌も、體力も智力も、日常生活即信仰生活も、萬事萬端に平々凡々、萬人と同じ地平線下と水平線上と間一髪をも容れぬ處を、時々刻々に獨歩して居る一事が萬事で、語學にも更に不得手な私ですから、私ぐらゐな聖書原本の拾ひ讀みは凡人でさへあれば天才ならぬ誰にでも出來ます。まづこの拙譯を熟讀して下さい。

目次

第一章

一　序言（一の一―一八）……一一

二　前驅者ヨハネ（一の一九―三四）……一五

三　最初の弟子（一の三五―五一）……二〇

第二章

四　カナにおける婚禮（二の一―一一）……二四

五　宮キヨメ（二の一二―二五）……二六

第三章

六　ニコデモ（三の一―二一）……二九

七　ヨハネの再立證（三の二二―三六）……三四

第四章

八　サマリヤの女（四の一―四二）……三八

九　侍臣の子　癒さる（四の四三―五四）……四八

第五章
一〇 ベセスダの池（五の一—四七）……五一
第六章
一一 五千人の給食（六の一—一四）……六三
一二 湖上の彌崇（六の一五—二一）……六六
一三 カペルナウムにての問答（六の二二—七一）……六七
第七章
一四 カリイホ節會（七の一—五三）……八〇
第八章
一五 姦淫せし女（八の一—一一）……九二
一六 明暗の衝突（八の一二—五九）……九四
第九章
一七 生來の盲人（九の一—四一）……一〇八
第十章
一八 良き牧者（一〇の一—二一）……一一九
一九 齋宮節（一〇の二二—四二）……一二五
第十一章
二〇 ラザルの蘇生（一一の一—五七）……一二九
第十二章
二一 ベタニヤにおける受膏（一二の一—一一）……一四二
二二 彌崇の御入城（一二の一二—一九）……一四四
二三 時來る（一二の二〇—五〇）……一四六
第十三章
二四 最後の晩餐（一三の一—三八）……一五四
第十四章
二五 彌崇の御別辭（一四の一—三一）……一六三
第十五章
二六 彌崇は葡萄樹（一五の一—二七）……一七三
第十六章
二七 彌崇の御遺訓（一六の一—三三）……一八一
第十七章
二八 彌崇 弟子の爲に祈り給ふ（一七の一—二六）……一九二

第十八章
二九　彌崇　捕へられ給ふ（一八の一―二七）……二〇一
三〇　ピラトの前の彌崇（一八の二八―四〇）……二〇七
第十九章
三一　死刑の宣告（一九の一―一六上）……二一二
三二　十字架上の彌崇（一九の一六下―三七）……二一六
三三　彌崇の埋葬（一九の三八―四二）……二二一
第二十章
三四　彌崇の復活（二〇の一―三一）……二二二
第二十一章
三五　湖畔における御顯現（二一の一―二五）……二三〇

ヨハネの
つたへし

福音書

第一章

一　序言（一の一——一八）

一　ハジメにコトバおはしたまひたり。
かつコトバは神と偕に在したまひたり。
而もコトバは神にて在したまひたり。
此者はハジメに神と偕に在し給ひたり。
スベテの物彼を通じて成れり。
而も成りたるところの物、
一だも彼を離れて成らざりき。

四 彼に於て イノチ おはし給ひたり。
かつ イノチは 人のヒカリにて在し給ひたり。
五 而して ヒカリは ヤミに於て かがやき給ふ。
而も ヤミは ソレを おさへざりき。

六 神より遣されたる人 起れり。
名は 彼に ヨハネ。
七 此者は 立證にへと 來れり。
ヒカリに就て 彼 立證さばやとてなり。
スベテの者 彼を通じて 信ぜよかしとてなり。
八 カノ者は ヒカリとして 在りたるに非ず、
されど ヒカリに就て 立證さばやとてなり。
九 ソレは 眞正なるヒカリにて 在し給ひたり。

皆 人を照し給ふところの物、
世にへと 來り給ふところの物。
一〇 彼は 世に於て 在し給ひたり。
かつ 世は 彼を通じて 成れり。
而も 世は 彼を 知らざりき。

一一 己が物にへと 彼 來りたまへり。
而も 己が者は 彼を 受附けざりき。
一二 でも 彼を 受けしほどの者！
彼の名を信じ込み居る者に、
彼 彼らに 神の兒と成るべき權を與へ給へり。
一三 ソノ者らは 血より出でしに非ず、
尙亦 肉の意より出でしにも非ず、
尙亦 男の意より出でしにも非ず、

されど　神より生れ出でられり。

一四 さて　コトバは　肉と成れり。
而して　我らに於て、やどれり。
而も　我ら　視ぬけり、彼のサカエを、
父よりの獨生者ノらしきサカエを。
メグミと眞理とに滿てる者！

一五 ヨハネ　彼について、立證しつつあり。
而して　叫びたり、言へるには
「我が後に來れる者は　我が前に成りたり。
彼は　我が至上者に在し給ひたればなり」と
我が言ひしところの者は　此者にて　在し給ひたり。
一六 それ　我らスベテの者、彼のユタケサの中より

而も　メグミの上にも　メグミを受けければなり。
一七 それ　オキテは　モオセを通じて、與へられしかど、
メグミと眞理とは彌崇貴德を通じて臨みければなり。
一八 未だ曾て　一人だも　神を觀たる者　無し
父のフトコロにと　在し給ふところの者！
獨生者なる子！　カノ者　明示したまへり。

二　前驅者ヨハネ（一の一九——三四）

一九 さて「汝！　汝は　誰なるか？」と、彼へ　問はばやとて、猶太人ら
祭司やレビ人を　エルサレムより出だして、彼の許へ　つかはしし
時、ヨハネの立證は是なり。二〇 而して　彼は　告白せり、かつ　彼は
否まざりき。而も　彼は　告白せり「我！　我は　貴德に非ざるなり」
と。二一 彼ら　また　彼へ　問へり——

然らば　何？　エリヤなるか？　汝！　汝は？

彼　また　言ふ

我ならず。

……

豫言者なるか？　汝！　汝は？

彼　また　答へられき——

あらず。

さるほどに　彼ら　彼に言へり——

誰なるか？　汝は？

これ　我らを送りし者に　我ら　答を　與へばやとてなり。

汝自身に就き　汝　何と言ひつつありや？

彼　陳べき——

我！　我は　荒野に於て　喚き居る者の聲！

「汝ら　主のミチを直くせよ」

まさしく　豫言者イザヤの言ひし如し。

而して　彼らは　パリサイ人の中より遣されたる者にてありたり。彼ら　又　彼へ　問へり、且　彼に言へり

然らば　何ぞ　汝！　汝　禊ぎつつありや？

もし　汝！　汝　貴德ならずば！

してまた　汝　エリヤならずば！

してまた　汝　豫言者ならずば！

ヨハネ　彼らに答へられき、言へるには——

我！　我は　水に於て　禊ぎつつあり。

汝ら！　汝らの識らざるところの者、

汝らの中央に　立臨みつつあり給ふ。

彼は　我が後に來り給ふところの者

ソノ者の、彼の履物の紐をさへ解きたくも

それ　我！　我は　ネウチなき者なり。
[二八]此らの事は　ヨハネが　禊ぎ居たる處、ヨルダンの彼方、ベタニヤに
於て　起れり。

[二九]明くる(日)に、彼の許へ來り給ふところの彌崇を　彼　眺めつつあ
り、而して　彼　言ふ——
視よ！　神のコヒツジ！
世の罪を除き給ふところの者！
[三〇]ソノ者の爲に、我！　我が言ひしは　此者なり。
「我が後に　男　來りつつあり、
我が前に　成りたるところの者！
彼は　我が至上者に在し給ひたればなり」と。
[三一]而も　我！　我は　彼を　能く識りたるにあらず、
されど　イスラエルに　彼の顯されればやとて、

唯　此故に　我！　我は　水に於て禊ぎつつ來れり。
[三二]而して　ヨハネ　立證せり、言へるには——
「天より出でて、ハトの如く、降るところの、
而も　彼の上に止まりし靈を　我　觀ぬきたり」と。
[三三]而も　我！　我は　彼を　能く識りたるに非ず、
されど　水に於て禊ぐべく、我を送り給ひし者、
カノ者　我に言ひ給へり——
「それ　汝　ソノ者の上に　降るところの、
かつ　彼の上に止まるところの靈を視なば、
此者ぞ　聖靈に於て禊ぐところの者なる！」
[三四]而して　我！　我　見たり、且　我　立證したり、
「此者は　神の子なり」と。

三　最初の弟子（一の三五――五一）

三五 明くる(日)に、再度、ヨハネ　疾く立臨みたり。かつ　彼の弟子の中よりも二(人)。而も　歩みゐ給ふところの彌崇を眺め込みて、彼言ふ――

　　視よ！　神のコヒツジ！

三七 而して　二(人)の弟子、彼の語り居るを聞けり。かつ　彼ら　彌崇に附従へり。　三八 で、彌崇　振向き給ひて、而も　附従ひ居るところの彼らを觀ぬきて、彼らに言ひ給ふ

　何を　汝ら　あさりつつありや？

で、彼ら　彼に言へり

　ラビ！　〔ソレは　飜譯されて「先生」と言はるること〕

　何處に　汝　止まり給ふや？

三九 彼　彼らに言ひ給ふ

　汝ら　來つつあれ、而して　汝ら　見つつあらん。

さるほどに、彼ら　來れり、而して　何處に　彼　止まり給ふかを見にき。かつ　カノ日　彼に添ひ、彼ら　止まれり。時は　第十頃(トトキゴロ)にてありたり。

四〇 ヨハネの側より聞きしところの者、かつ　彼に附從ひしところの者、の二(人)の中の一(人)は　シモン　ペッロの兄弟アンヅレにてありたり。　四一 此者、まづ　己が者なる兄弟シモンを見出し、而して　彼に言ふ

　我ら　メシヤを見出したり〔ソレは飜譯されて「貴德なり」とのこと〕

四二 彼　彼を　彌崇の許へ導けり。彌崇　彼を眺め込みて、言ひ給へり

　汝！　汝は　ヨハネの子シモンなり。

　汝！　汝は「ケパ」と呼ばれつつあらん〔ソレは「ペッロ」と飜譯さるること〕

四三 明くる(日)に、彌崇　ガリラヤへ出で來りたがりたまへり。而して

彼　ピリポを見出し、かつ　彼に言ひ給ふ

汝　我に附從ひつつあれ。

[四四]で、ベスサイダよりのピリポは　アンヅレやペツロの町の出にてありたり。[四五]ピリポ　ナサナエルを見出し、而して　彼に言ふ

モオセが　オキテに於て、また　豫言者も

書きしところの者を　我ら　見出したり。

ヨセフの子　彌崇を、ナザレよりの者を。

[四六]而して　ナサナエル　彼に言へり

ナザレより出でて、何の善き物ぞ　あり能ふべき？

ピリポ　彼に言ふ

汝　來れ、而して　見よ！

[四七]彌崇　彼の許へ來るところのナサナエルを見たまへり、而して　彼に就て　言ひたまふ

視よ！　まことに　イスラエル人！

ソノ者に於て　イツハリは　あらず！

[四八]ナサナエル　彼に言ふ

何處より　汝　我を知り給ふか？

[四九]彌崇　答へられ、而して　彼に言ひ給へり

ピリポが　汝を呼ばはりし前に、

無花果樹の下に居る汝を　我　見にき。

ナサナエル　彼に　答へられき

ラビ！　汝！　汝は　神の子なり！

汝！　汝は　イスラエルの王なり！

[五〇]彌崇　答へられ、而して　彼に言ひ給へり

それ「無花果樹の下蔭に、汝を　我　見にき」と

我　汝に言ひしを以て、汝　信じつつありや？

此らよりも大なる事を　汝　見つつあらん。

五 彼 また 彼に言ひたまふ

まことに まことに 我 汝らに言ふ
汝ら 見つつあらん 開放たれたる天を！
かつ 人の子の上を 昇りつつあるところの、
また 降りつつあるところの神のツカヒを！

第二章

四 カナに おける婚禮（二の一——一一）

さて 第三日に、ガリラヤのカナに於て、婚禮 催されけり。而して
彌崇の母も 其處に 在りたり。で、彌崇も、彼の弟子も 婚禮にへと
招ばれけり。而も 酒 盡きなんとせしかば、彌崇の母 彼に向ひて
言ふ

酒を 彼ら 有ち居らず！
四 而して 彌崇 彼女に言ひたまふ
何をか？ 我と汝とに 女よ！
なほ未だ 我が時 到らざるに！
五 彼の母 世話人に言ふ
何にても 彼 汝らに言はば、汝ら 爲されよ。
六 で、猶太人のキヨメに應じて、其處に、据ゑらるるところの、各自
二三斗入りの石の水甕 六 ありたり。七 彌崇 彼らに言ひたまふ
汝ら 水にて 水甕を 滿たせ。
而して 彼ら 緣まで 其らを みたせり。八 彼 又 彼らに言ひ給ふ
汝ら 汲め、今！
而して 饗宴長に 運びつつあれ
九 で、彼ら はこべり。で、饗宴長 酒と爲られたる水を味はへるや、
而も 彼 ソの 何處よりなるかを 能く識りたらざりしかば、（で

も、水を汲みたる者なる世話人は能く識りたり」饗宴長　新郎を呼ばはり、而して　彼に言ふ

皆　人は　まづ　良き酒を　供す、
而も　彼ら　酔はされし頃には　劣れるノを！
汝！　汝は　唯今までも　良き酒を保ちたり！
一二 彌崇は　シルシの此のハジメのを　ガリラヤのカナに於て、爲し給へり。而して　彼の榮光を顯し給へり。かくて　彼の弟子も　彼を信じ込めり。

五　宮キヨメ（二の一二——二五）

一三 此事の後、彼　カペルナウムへと下り給へり。彼御自身、かつ　彼の母も、兄弟も、彼の弟子も。而も　其處に　彼ら　幾日も　止まらざりき。
一四 さて、猶太人のスギコシ　近くありたり。而して　彌崇　エルサレムへと上り給へり。一四 而して　彼　宮に於て、牛や羊やハトなどを賣れる者と、坐れるところの兩替人とを見出し給へり。一五 而して　彼　繩より鞭を作り出し給ひて、宮の中より、羊や牛など、凡ての者を放り出し給へり。尙亦、兩替人の錢をも　ぶちまき給へり。加之、机をも　くつがへし給へり。一六 彼　又　ハトを賣り居る者に言ひたまへり。
汝ら　此處より　此らの物を　取除け。
我が父の家を　商ひの家と爲し居る勿れ。
一七 「汝の家の熱心　我を食盡しつつあらん」と　書かれて有ることを彼の弟子ら　憶ひ出さしめられき。
一八 さるほどに、猶太人ら　答へられ、而して　彼に言へり
それ　汝　此らの事を　爲し居るからには、
汝　如何なるシルシを　我らに示すや？
一九 彌崇　答へられ、而して　彼らに言ひ給へり

汝ら この堂を くづせ、
而も 三日に於て、我 ソレを おこさん、
二〇さるほどに、猶太人ら 言へり
四十有六年にて、この堂は 建てられり、
而も 汝! 汝は 三日に於て、ソレを起さんや?
二一でも、カノ者は 彼の體の堂に就て、言ひ給ひたり。二二さるほどに、
死ねる者の中より、彼 起され給ひし時、彼 此事を言ひ給ひたり
とのことを、彼の弟子ら 憶ひ出さしめられき。而して 彼ら プミ
にても、亦、彌崇の言ひ給ひしところのコトバにても 信ぜり。
二三で、スギコシに於て、彼が エルサレムに於て、在し給ひたるほど
に、彼が 節會に於て、爲し給ひたるところの、彼のシルシを視ぬけ
るところの多くの者は 彼の名を信じ込めり。二四でも、彌崇御自身! 彼
御自身 凡ての者を知り給へる故、彼は 彼らに 御自身を任せ居り

給はず、二五而も 人に就き、誰にても 立證(アカ)さばやとの必要 彼に あ
らざりければなり。そは 人に於て、何事の有りたるかを 彼御自身
知り給ひたればなり。

第三章

六 ニコデモ(三の一——二一)

一で、パリサイ人の中よりの人ありたり。猶太人の長、名は 彼に ニ
コデモ。二此者、夜、彼の許へ來れり。而して 彼に言へり
ラビ! 汝は 神より來り給ひたる
先生なることを 我ら 識れり。
そは、もしそれ 神 彼と偕に在し給はずば、
汝! 汝が 爲し給ふところの此らのシルシを

誰も　爲し居る能はざればなり。
三 彌崇　答へられ、而して　彼に言ひたまへり
まことに　まことに　我　汝に言ふ
もしそれ、誰にても　上より生れざれば、
神の國を　見ること能はず。
四 ニコデモ　彼に向ひて言ふ
いかにして　人、老いたる者　生れ能ふか？
彼　第二次、ソの母の胎へ入込み、又　生れ能ふか？
五 彌崇　答へられ給へり
まことに　まことに、我　汝に言ふ
もしそれ　誰にても　水と靈とより　生れ出でずば、
神の國へ　入り來ること能はず。
六 肉より生れ出でたる物は　肉なり。
又、靈より生れ出でたる物は　靈なり。

七 「汝ら　上より生れざる可らず」と
我　汝に言ひしことを　汝　あやしむ勿れ。
八 風は　何處にても、ソの欲する處へ　吹きつつあり。
而して　汝　ソの聲を　聞きつつあり。
されど　ソの　何處より　來りつつあり、
又、ソの　何處へ退きつつあるかを　汝　識らず。
靈より生れ出でたる者は　皆　斯の如き者なり。
九 ニコデモ　答へられ、而して　彼に言へり
如何にして　此らの事　起り能ふか？
一〇 彌崇　答へられ、而して　彼に言ひ給へり
汝！　汝は　イスラエルの先生なり、
而も　此らの事を　汝　知らざるか？
一一 まことに　まことに　我　汝に言ふ

我ら　識れるところの事を　かたりつつあり、
かつ　我ら　見たるところの事を　立證(アカ)しつつあり。
一一 而も　我らの立證を　汝ら　受けつつあらず。
一二 もし　地上の事を　我　汝らに言ひてさへ、
而も　汝ら　信じつつあらざるに、
もしそれ　天上の事を　我　汝らに言はば、
いかにして　汝ら　信じつつあらんや？
一三 而も　天より出でて、降りしところの者一人の子、
天において、在し給ふところの者の外、
誰も　天へと　昇りたる者なし。
一四 而して　まさしく　モオセが　荒野に於て、
蛇を擧げしごとく、まさに　かくのごとく、
人の子も　擧げられざるべからず。
一五 これ　彼に於て、信じつつあるところの者は　皆
トコシへのイノチを有ちつつあれかしとてなり。
一六 そは　獨生者なる、彼の子を與へ給ひしほどに、
神は　しかく　世を　愛し給ひければなり。
これ　彼を信じ込みつつある者は　皆　亡びず、
されど　永遠(トコシヘ)の生命(イノチ)を有ちつつあれかしとてなり。
一七 そは　これ　世を　さばかばやとて、
神は　子を　世にへと遣し給はざりければなり。
されど　これ　世は　彼を通じて救はれかしとてなり。
一八 彼を信じ込み居る者は　さばかれつつあらず、
信じ居らざる者は　すでに　さばかれたり。
それ　彼は　神の獨生者なる子の名を
信じ込みたらざればなり。
一九 で、コレぞ　サバキなる！

それ　ヒカリは世にへと　來りたればなり、
而も　人は　光よりも寧ろヤミを愛しければなり。
そは　彼らのワザ　惡き物にてありたればなり。
二〇そは　ムダゴトを　おこなひ居る者は
皆　ヒカリを　にくみつつあればなり。
而して　光の許へ　來つつあらざればなり。
これ　彼のワザの　あばかれざらめとてなり。
二一でも、眞理（マコト）を爲し居る者は　光の許へ來つつあり、
これ　彼のワザの　あらはされざらんとてなり。
それ　神に於て、爲し遂げられたる事なればなり。

七　ヨハネの再立證（三の二二——三六）

二二此らの事の後、彼の弟子も、猶太國にへと來れり。而して　彼
其處に、彼らと偕に、すごしたまへり、かつ　禊ぎを給ひたり。二三で、

ヨハネも　亦　サリムのチカク、アイノンに於て、禊ぎつつありた
り。それ　其處に　水　多くありたればなり。而して　彼ら　附纏
ひ居たり。かつ　彼ら　禊がれゐたり。二四そは　ヨハネ　なほ未だ
ヒトヤへ　投込まれたる者ならざりければなり。

二五さるほどに、ヨハネの弟子の中より、キヨメにつき、猶太人と　質
疑　起れり。二六而して　彼ら　ヨハネの許へ來れり。　かつ　彼ら
彼に言へり
ラビ！　ヨルダンの彼方にて、汝と偕に在したるところの者！
ソノ者に、汝！　汝　立證したるところの者！
視よ！　此者　みそぎつつあり！
而して　凡ての者　彼の許へ來りつつあり！
二七ヨハネ　答へられ、而して　言へり
もしそれ　天より　彼に與へ出されたる物に非ざれば、

人は　何物をも　受けつつあり能はず。
二八「我！　我は　貴徳に　あらざるなり。
　されど　我は　カノ者の前に遣されたる者なり」
と　我が　言ひしことを
汝ら！　汝ら自身　我に　立證しつつあり。
二九ハナヨメを有てるところの者は　ハナムコなり。
でも、立臨みたる者、且、彼に聞き居る者なる
ハナムコの友は　ハナムコの聲の故に、
ヨロコビに　よろこびつつあり。
さるほどに、我ノなる、この歡喜は　滿されたり。
三〇カノ者は　さかんならざる可らず、
でも、我！　我は　おとろへざる可らず。
三一上より來るところの者は　凡ての者の上に在し、

地より出づるところの者は　地よりの出なり。
而して　彼は　地より語り出しつつあり。
天より出で來るところの者は　凡ての者の上に　在したまふ。
三二彼は　見たるところ、且　聞きしところの事を、
この事を　彼は　立證しつつあり給ふ。
而も　彼のアカシを　誰も　受けつつあらず。
三三彼のアカシを　受けしところの者は、
「神は　眞正(マコト)なる者なり」と　證印せり。
三四そは　神の　つかはし給ひしところの者は
神の詞を　かたりつつあればなり。
そは　彼は　量(ハカリ)にて　靈を與へ出し給はざればなり。
三五父は　子を　愛しつつありたまふ、
而して　凡ての物を　彼の手に於て　與へ給ひたり。

子[三六]を信じ込み居る者は　永遠の生命を有ちつつあり、
でも、子に歸依し居らざる者は　イノチを見つつあらざらん。
されど　神のイカリ　彼の上に　止まりつつあり。

第四章

八　サマリヤの女（四の一——四二）

一 さるほどに、「彌撒は　ヨハネよりも　多くの弟子を　つくりつつあり、又　みそぎつつあり」と　パリサイ人らが　聞きしとのことを、主　知り給ひしかば、二「さて　その實、彌撒御自身みそぎ給ひたるに非ず、されど彼の弟子」三　彼　ユダヤを辭したまへり。而して　再度、ガリラヤへと往きたまへり。四　で、彼　サマリヤを經て、通り給はざるを得ざりき。五 さるほどに、彼は　ヤコブが　ソの子ヨセフに與へしところのパタケのトナリ、「スカル」と謂はるる、サマリヤの町へと來りたまふ。六 で、其處に、ヤコブの泉ありたり。さるほどに、旅路の中とて、疲れ果てたる彌撒　しかく　泉に凭掛りて、坐り給ひたり。時は　第六頃[ムツ]にてありたり。

七 サマリヤよりの女、水を汲みに出で來る。彌撒　彼女に言ひたまふ
汝　我に　飲まさしめよ。
八 そは　彼の弟子ら　食物を買はばやとて、町へと、とく往きたればなり。九 さるほどに、サマリヤ者なる女　彼に言ふ
いかなれば　汝！　汝　猶太人たる者が
サマリヤ女なる我より、飲まんと求めつつありや？
そは　猶太人は　サマリヤ人に交りつつあらざればなり。一〇 彌撒　答へられ、而して、彼女に言ひ給へり
もし　神の賜物を、且、「汝　我に飲まさしめよ」と

汝に言ひ居るところの者の　誰なるかを　汝　よく識りたらば、
汝！　それ　汝は　彼に　生ける水を求めしものを、
且、それ　彼は　汝に　あたへしものを！
女[一二]　彼に言ふ
主よ！　して　汝　汲物をも　持ち給はざるに、
而も　キドは　ふかきものなり。
さるほどに、汝　何處よりして、
生けるところのモノなる水を　有ち給ふか？
汝[一三]！　汝は、我らに　キドを　あたへ、
且、彼自身も、彼の子も、彼の家畜も、
ソの中より飲みしところの、我らの父
ヤコブよりも大なる者に　おはし給ふや？
彌崇[一三]　答へられ、而して　彼女に言ひ給へり
コの水の中より飲むところの者は

皆　再度、かわきつつあらん。
でも[一四]、我！　それ　我が　彼に與へつつあらん
ところの水の中より　飲めるほどの者は
決して　トコシへまでも　渴きつつあらざらん。
されど　我！　我が　彼に與へつつあらんところの
水は　彼において、トコシへのイノチにへと、
迸りつつあるところの水の泉と成りつつあらん。
女[一五]　彼に向ひて言ふ
主よ！　汝　我に　コの水を　あたへ給へ。
これ　我が　かわきつつあらざるために、
尙亦、此處までも　汲みに通ひつつあらざる爲に。
彌崇[一六]　彼女に言ひたまふ
汝　戻れ、汝の夫を　さそへ。

而して　汝　此處まで　來れ。
女[一七]　答へられ、而して　彼に言へり
　我は　有ち居らず　夫を。
彌崇[一八]　彼女に言ひたまふ
　よろしく　汝は　言へり
「夫を　我は　有ち居らず」と。
そは[一九]　五(人)も　男を　汝　有ちければなり、
而も　今　汝が　有てるところの者は
汝の夫に　あらざればなり。
　コの　眞實(マコト)の事を　汝　陳べたり。
女[一九]　彼に言ふ
主よ！　汝！　汝は　豫言者なり。と　我　觀る。
我らの父[二〇]は　コの山に於て、をがめり。

而も　汝ら！　汝ら　言ひつつあり
「をがみつつあらざる可らざる處の
　場處は　エルサレムに於て　あり」と。
彌崇[二一]　彼女に言ひたまふ
汝　我を信じつつあれ　女よ！
それ　コの山に於けるにも非ず、
尙亦、エルサレムに於けるにも非ずして、
汝ら　父に　ぬかづきつつあらんトキの
時ぞ　來りつつあればなり。
汝ら！[二二]　汝らは　識らざるところの物を拜みつつあり、
我ら！　我らは　識れるところの物を拜みつつあり。
それ　スクヒは　猶太人より出づるものなればなり。
されど[二三]　眞實(マコト)なる禮拜者は　靈と眞理(マコト)とに於て、
父に　ぬかづきつつあらんトキの

時は　來りつつあり、而も　今なり！
そは　父も　亦　彼を拜み居るところの者を、
それほどの者をこそ　あさりゐ給へばなり。
神は　靈！
而して　彼を　をがみ居るところの者も、
靈と眞理とに於て、をがみつつあらざる可らず。
女　彼に言ふ
我　識れり、メシヤ　來り給ふことを（「貴德」と云はるる所の者）
何時にても　カノ者　來り給ふ時、
彼は　凡ての事を　我らに　布令たまはん。
彌崇　彼女に言ひたまふ
我なり！　汝に語り居るところの者（は彼）！
而して　此際、彼の弟子　來れり。而も　彼らは　彼が　女と偕に、

語りゐ給ひたるを　あやしみ始めたり。さりながら、誰も「何を　汝
あさりゐ給ふや？」、或は「何を　汝　彼女と偕に語りゐ給ふや？」
と、あへて　言はざりき。さるほどに、女　彼女の水瓶を置去り、
而して　町へと往けり。而して　彼女　人に言ふ
いざ　來れ！　汝ら　視よ！　我が爲ししところの
凡ての事を　我に言ひしところの人を！
まあ　此者こそ　貴德にはあらざるか？
彼ら　町の中より出で來れり。而して　彼の許へ來つつありたり。こ
のスキに、弟子ら　彼に請ひ始めたり。言へるには、
ラビ！　汝　食したまへ。
でも、彼　彼らに言ひたまへり
我！　我は　汝らが　ソの識らざるところの
食ふべきクヒモノを　有ちつつあり。
さるほどに、弟子ら　相互に向ひ、言ひ始めたり

まあ！　誰ぞ　彼に　食するやう　もたらししや？
彌崇[三四]　彼らに言ひたまふ
我ノなる　クヒモノは
我を送り給ひし者の意を爲すことと、
彼のワザを　完うすることとなり。
汝ら！[三五]　汝ら　言ひつつあるに非ずや？
それ「なほ　四箇月　あり
而して　カリイレは　來つつあり」と。
視よ！　我　汝らに言ふ
汝ら　汝らの目を　見上げよ、
而して　汝ら　畠を　見よ。
其らは　カリイレをこそと、
すでに　白ばめる者なることを。
穫りつつある者は　手間代を受けつつあり、[三六]

而して　トコシへのイノチへの果を集めつつあり。
これ　播きつつある者も、穫りつつある者も、
もろともに　よろこび居らばやとてなり。
そは[三七]　コレにて「甲は　播きつつある者、
乙は　穫りつつある者なり」との
コトバこそ　眞正(マコト)なるものなればなり。
汝ら！[三八]　汝ら　骨折たること無き所の物を穫るべく、
我！　我　汝らを　つかはせり。
他の者は　骨折りたり、
且、汝ら！　汝らは　彼らの骨折へと入來りたり。
で、[三九]「我が爲ししところの凡ての事を　彼　我に言ひたまへり」と立證
しつつある女のコトバを通じて、カノ町の中よりのサマリヤ人の多く
の者は　彼を信じ込めり。[四〇]さるほどに、サマリヤ人ら　彼の許へと來

れるや、彼らの側に、彼の止まるやう、彼ら　請ひ始めたり。而し
て　彼　其處に、二日、止まり給へり。[四一]而も　彼のコトバを通じて、
ますます　多くの者は　信ぜり。[四二]して、彼ら　女に言ひ始めたり
我ら　もはや　汝ノなる話シの故に、信じ居るに非ず、
そは　我ら自身　聽きたればなり。
而も「此者は　眞正に　世の救主なり」
とのことを　我ら　識りたればなり。と。

九　侍臣の子　癒さる（四の四三——五四）

[四三]で、二日の後、彼　其處より　ガリラヤへと出で來り給へり。[四四]そは
彌崇御自身「豫言者は　己が故郷に於て、尊敬を有せず」とのことを
立證し給ひければなり。[四五]さるほどに、彼　ガリラヤへと來りたまひ
し時、節會において、彼が　エルサレムに於て、爲し給ひし程の凡て
の事を見たるところのガリラヤ人ら　彼を歡迎せり。そは　彼ら自身

も、亦、節會にへと來りければなり。
[四六]さるほどに、彼が　水を　酒と爲し給ひし處なる、ガリラヤのカナへ
と、彼　再度、來りたまへり。而して　或る侍臣ありたり。ソノ者の
子は　カペルナウムに於て、病みゐたり。[四七]彌崇　ユダヤより出でて、
ガリラヤへと　おもむき給ふと聞きて、此者　彼の許へ往けり。而し
て「下り給へかし、かつ　彼の子を　いやし給へかし」と　請ひ始め
たり。そは　彼　將に　死にかけ居たればなり。[四八]さるほどに、彌崇
彼に向ひて　言ひたまへり
もしそれ　シルシと奇蹟とを　汝ら　見ざりせば、
汝ら　決して　信じまじきに！
[四九]侍臣　彼に向ひて、言ふ
主よ！　汝　下りたまへ
我が小童の　死に去らぬ前に。

五〇 彌崇 彼に言ひたまふ

汝 進みつつあれ、汝の子 生きつつあり。

彌崇 彼に言ひ給ひしところのコトバに於て、人 信ぜり。而して
彼 進みゐたり。で、[五一] 彼 既に 下り居れるに、「彼の童 生きつつ
あり」と、云へるところの、彼の奴僕 彼に出遇へり。[五二] さるほどに、
彼 ソの治りかけしところの時を 彼らより聞きただせり。さるほ
どに、彼ら 彼に言へり、「昨日、第七時、熱 彼を去れり」と。[五三] さる
ほどに、「汝の子 生きつつあり」と、彌崇 彼に言ひ給ひしところの、
カノ時にてのことを、父は 知れり。而して 彼自身も、彼の全家
も 信ぜり。[五四] コレは ユダヤより出でて、ガリラヤへと來り給ひし
ところの彌崇 再度、爲し給ひし第二のシルシ。

第五章

一〇 ベセスダの池（五の一——四七）

[一] 此らの事の後、猶太人の節會ありたり。而して 彌崇 エルサレムへ
と 上りたまへり。
[二] で、エルサレムに於て、羊（門）の上に、希伯來語にて、「ベセスダ」
と渾名さるるものなる、五の廊を有てるところの池あり。[三] 此らにおい
て、病める者の——盲者の、跛者の、萎えし者の大衆〔水のマゼカヘシを待
ち居る者の〕横たへられ居たり。〔そは[四] 主のツカヒ、折々、池に於て、降りつつあ
り、而して水をマゼカヘシ居たればなり。さるほどに、水のマゼカヘシの後、は入りし第
一の者は、たとひ いかなる疾患に冒されつつありとも、健なる者に成りゐたり」で、[五]
其處に、三十八年も、ソの病に罹り居る或人ありたり。[六] 彌崇 臥し居

るところの此者を見たまひて、かつ、すでに、ソの久しきに亙れることを知りて、彼に言ひたまふ

汝 健なる者と 成りたく欲するや？

病める者 彼に答へられき

主よ！ 何時にても、水の マゼカへされし時、

我を 池へと投込む爲の人を 我 有たず。

で、我！ 我 來りかけつつある間に、

他の者 我の前に、くだりつつあり。

彼に言ひたまふ

汝 起きよ、汝 ソの床を上げよ。

而して 汝 あゆみつつあれ。

かくて 人 たちまち 健なる者と成れり。 かつ 彼 ソの床を上げ、而して 歩み始めたり。

でも、サバスは カノ日に於て、ありたり。さる程に、猶太人ら 癒されたる者に言ひ始めたり

それ サバスなり！

而も 床を上ぐるは 汝に あるまじきなり！

でも、ソの者 彼らに答へられき

我を 健なる者と 爲し給ひし者

カノ者 我に言ひたまへり

汝 ソの床を あげよ、

而して 汝 歩みつつあれ、

彼ら 彼に問へり

「汝 上げよ、而して 汝 歩みつつあれ」と

汝に言ひし者なる人は 誰なるか？

でも、癒されし者 ソの誰なるかを よく識りたらざりき。そは 場處に於て、群衆の居れるものから、彌崇 ぬけ出で給ひければなり。

一四 此らの事の後、彌崇宮に於て、彼を見出し、而して 彼に言ひたまへり

視よ！ 汝 健なる者と 成りたり。
何か 更に惡き事の 汝に起らざるやう、
一五 汝 もはや 罪つくりつつあるなかれ。
人 往けり。而して 彼を 健なる者と 爲し給ひし者は 彌崇なりとのことを、猶太人らに言ひふらせり。
一六 而も 此事の故に、猶太人ら 彌崇を狩立て始めたり。サバスに於て、
彼 此らの事を爲し居給ひたればなり。
一七 で、彌崇 彼らに答へたまへり
我が父は 唯今までも 働きたまふ、
我！ 我も 亦 はたらきつつあり。
一八 さるほどに、此事の故に、猶太人ら 彼を殺すべく、ますます あせりゐたり。彼は ただに サバスを破りゐたるのみならず、されど亦、彼自身を 神に等しき者と爲し居りて、神を オノレの父と言ひ居たまひたればとてなり。

一九 さるほどに、彌崇 答へ、而して 彼らに言ひ給へり
まことに まことに 我 汝らに言ふ
もしそれ 何をか 爲し居給ふところの父を 眺め居らずば、
子は 何事をも 彼自身より 爲し能はず、
そは それ カノ者の 爲しゐ給ふところの事をば、
此らの事をば、子も 亦 等しく 爲し居ればなり。
二〇 そは 父は 子を 愛慕しつつあり給ふ、
而して 彼御自身 爲しゐ給ふところの
凡ての事を 彼に 示しつつあり給ふ
而も これ 汝ら あやしみつつあれかしとて、

此らよりも　さらに　大なるワザを
彼　彼に　示しつつあり給はん。
二二 そは　正しく　父が　死ねる者を　起しゐたまひ、
また　生かしゐたまふごとく、
しかく　子も　亦　ソの欲するところの者を
生かしつつあればなり。
二三 そは　父は　決して　誰をも　さばき給はず、
されど　サバキをば、皆　子に委ね給ひたればなり。
二三 これ　凡ての者が　父を　敬ひつつあるごとく、
彼ら　亦　子をも　敬ひつつあれかしとてなり。
子を　うやまひつつあらざる者は
彼を送り給ひし者なる父をも　敬ひつつあらず。
二四 まことに　まことに、我　汝らに言ふ

それ　我がコトバを聽きつつある者は、
かつ　我を送り給ひし者を信じ居る者は、
トコシへのイノチを　有ちつつあり、
而して　サバキにへと　來りつつあらず
されど　死より出でて、生命にへと移りたればなり。
二五 まことに　まことに　我　汝らに言ふ
それ　時は　來りつつあり、而も　今なり！
死ねる者が　神の子の聲を　ききつつあらん時、
而して　ききしところの者は　生きつつあらん。
二六 そは　まさしく　父　御自身に於て、
イノチを有ちたまふごとく、
しかく　子にも　亦　御自身に於て、
有ち給ふべきイノチを　與へ給ひければなり。

二七 なほまた、サバキを　爲し給ふべき權を
彼は　彼に　あたへたまへり、
それ　彼は　人の子なればなり。

二八 汝ら　此事を　あやしみつつある勿れ。
それ　時は　來りつつあればなり。
ソの時に、パカにおけるところの者なる
凡ての者が　彼の聲を　ききつつあらん。
二九 而も　善き事を　爲しし者は
イノチの復活にへと、
でも、ムダ事を　おこなひし者は
サバキの復活にへと　進み出でつつあらん。

三〇 我！　我は　我自身より　何事をも爲し居る能はず、

正しく　我　聽き居る如く　我　さばきつつあり。
而も　我ノなるサバキは　ただしきものなり。
それ　我は　我ノなる意を　あさりつつあらず、
されど　我を送り給ひし者の意をなればなり。
三一 我！　もしそれ、我自身に就て、我　立證（アカ）し居らば、
我がアカシは　眞正（マコト）なるものに　あらざるなり。
三二 我について、立證しつつある者は　他ノ者なり。
而も　我に就て、彼が　立證し居るところの立證は、
眞正（マコト）なるものなり　とのことを　我　識れり。

三三 汝ら！　汝らは　ヨハネの許へ　……　遣したり。
而して　彼は　眞理（マコト）にぞ　立證したり。
三四 でも　我！　我は　立證を　人より受けつつあらず、
されど　これ　汝らが　すくはれよかしとて、

我　此らの事を　言ひつつあり。
三五 カノ者は　燃されつつある者、
また　輝きつつある者なるトモシビにてありたり。
で、汝ら！　彼のピカリに於ける時だけ、
汝ら　やたらに　よろこばされたがれり。
三六 でも、我！　我は　ヨハネのよりも
ヨリ大なるアカシを　有ちつつあり。
そは　これ、我　其らの事を完うすべければとて、
父　我に　あたへ給ひたるところのワザが
我が　爲しつつあるところのワザ自體が
父　我を　つかはし給ひたりとのことを
我について、立證しつつあればなり。
三七 而も　我を　おくり給ひし者なる父、
カノ者は　我について、立證し給ひたり。

汝ら　未だ曾て、彼の聲を聽きたることもなく、
なほまた　彼のスガタを視たることも　なし、
三八 而も　汝ら　彼のコトバを——汝らに於て、
止まり居るモノを　汝ら　有ちつつあらず、
それ　カノ者の　つかはし給ひしところの者を、
此者を　汝ら！　汝ら　信じつつあらざればなり。
三九 汝ら　フミを　さぐりつつあり。
それ　汝ら！　汝らは　其らにおいて、
トコシへのイノチを有つべく　考へ居ればなり。
かつ　カノ者は　我に就て立證し居る者なればなり。
四〇 而も　汝ら　イノチを　もたばやとて、
四一 我が許へ　來たがりもせざるとは！
人よりのサカエを　我　受けつつあらず、

四二されど 我 汝らを 知りたり、
汝ら 神の愛を、汝ら自身に於て、もち居らざることを。
四三我！ 我は 我が父の名に於て、來りたり、
而も 汝ら 我を 受けつつあらず、
もしそれ 他の者 己のなる名に於て、來らば、
カノ者を 汝ら 受けつつあらん。

四四相互より サカエを受けつつある者、
而も 唯一の神よりなるところの榮光を漁り居らざる汝ら！
いかにして 汝ら 信じ能ふか？
四五我！ 我は 父に向ひて、汝らを訴へつつあらん
と 汝ら 考へつつある勿れ。
汝らを 訴へつつある者あり！ モオセ！
汝ら！ ソの者をこそと 汝ら 望みたるところの者！

四六そは もし 汝ら モオセを信じゐたるならば、
それ 汝ら 我をも 信じゐたるべければなり。
そは カノ者は 我について、書きければなり。
四七で、もし カノ者のカキモノを、汝ら 信じつつあらずば、
いかにして、汝ら 我ノなる詞を信じつつあらんや？

第六章

一 五千人の給食（六の一——一四）

一此らの事の後、彌崇 ガリラヤのなるチベリヤの海の彼方へ往き給へ
り。二で、夥しき群衆 彼に附從ひ居たり。それ 病める者の上に、爲
し居給ひたるところのシルシを 彼ら 觀ぬきつつありたればなり。
三で、彌崇 山へと登り、而して 其處に、彼の弟子と偕に 坐り居給

ひたり。　で、[四]猶太人の節會なるスギコシは　近くありたり。
[五]さるほどに、彌崇　目を擧げて、而も　夥しき群衆　彼の許へ來りつ
つあることを　觀ぬきて、ピリポに向ひ、言ひたまふ
何處より、我ら　買ふべきか？
パンを　此らの者が　食する爲に！
[六]でも、彼を　ためしながら、彼は　此らの事を言ひ居たまひたり。そ
[七]は　彼御自身　何を　爲しかけ居たるかを　よく識り給ひたればなり。
ピリポ　彼に答へられき
各自　少しづつ　受くるためにも、
二百デナリのパンすら　彼らには　足らず。
[八]彼の弟子の中の一（人）、シモン　ペツロの兄弟なるアンヅレ　彼に
言ふ
[九]大麥パン　五と　サカナ　二とを
有てるところの幼童　此處に　在り。

[一〇]されど　カホド多くの者へは　此らの物も何かある？
彌崇　言ひたまへり
汝ら　人人を　ねまるやうに　爲せ。
で、場處に於て、草　多くありたり。さるほどに、數　五千ほどの
男　ねまれり。
[一一]さるほどに、彌崇　パンを取りたまへり。而して　感謝して、彼は
ねまれる者に　くばり給へり。亦　ひとしく　サカナの中よりも
彼らの欲しがり居たるだけを　……。[一二]で、彼ら　滿たさ
れしかば、彼　ソの弟子に言ひたまふ
何も廢らざるやう、餘りしクヅを　汝ら　集めよ。
[一三]さるほどに、彼ら　集めり。而も　大麥パン　五の中より食したる者
に、餘りしところのチギリクヅの十二カゴを　彼ら　みたせり。[一四]さ
るほどに、彼が　爲し給ひしところのシルシを視しところの人人　言

ひ居たり

此者こそ　眞正に　世にへと

來るところの者なる贖言者なれ！　と。

一二　湖上の彌崇（六の一五——二一）

一五 さるほどに、彼ら　將に　彼を　王と爲さばやとて、來り、而して彼を捕へかけつつあることを、知り給ひし彌崇、再度、御自身のみ、山へと遁れたまへり。

一六 で、夕と成りしかば、彼の弟子ら　海へ臨み下れり。而して　彼ら舟へ乘込みて、海の彼方、カペルナウムへと來はじめたり。而してはや既に　ヤミと成りたり。而も　彌崇　なほ未だ　彼らの許へ來り給ひたらざりき。一八 して、大なる風　吹きまくりて、海は　荒立てられるたり。一九 さるほどに、二十五、或は　三十スタヂヤほど　漕ぎたる彼ら、海の上を歩みつつあり、かつ　舟の近クに成りつつある彌崇を觀

ぬき、而して、恐れしめられり。二〇 でも、彼　彼らに言ひたまふ

我なり！　汝ら　おそれつつある勿れ。

二一 さるほどに、彼ら　彼を　舟へと　受入れたがれり。而して　舟は　たちまち　彼らが　其處へと　もがき居たるところの陸の上に　のぞめり。

一三　カペルナウムにての問答（六の二二——七一）

二二 明る（日）に、海の彼方に立臨みたるところの群衆は　其處に　一の外、他の小舟の有らざりしことと、彌崇　ソの弟子に伴ひ、舟へと入り來りたまはず、されど　彼の弟子のみ　往きしこととを見にき。二三「されど　チベリヤより出でし小舟は　主　感謝し給ひて、彼らがパンを食ひし處の場處の近ク（來れり）」。二四 さるほどに、群衆　其處に、彌崇も在し給はず、尙亦、彼の弟子も（居ら）ざることを見し時、彼ら自身　小舟へ乘込めり。而して　彌崇を　あさりつつ、カペルナウムへと來れり。二五 かつ　海の

彼方に、彼を見出して、彼ら　彼に言へり
ラビ！　何時　汝　此處に　成らせ給ひたるか？
二六 彌崇　彼らに答へられ、而して　言ひたまへり
まことに　まことに　我　汝らに言ふ
汝ら　我を　あさりつつあり
それ　汝ら　シルシを見し故にあらず、
されど　汝ら　パンの中より　食ひ、
而して　汝ら　飽かされければなり。
二七 亡ぼされつつある所の者なるクヒモノをとにあらず、
されど　人の子が　汝らに與へつつあらんところの
トコシヘのイノチにへと　存へつつあるところの者
なるクヒモノをと　汝ら　はたらきつつあれ。
そは、此者を　神なる父　證印し給ひければなり。

二八 さるほどに、彼ら　彼に向ひて、言へり
我ら　神のワザを　働きつつあらばやとて、
二九 我ら　何を　爲しつつあるべきか？
彌崇　答へられ、而して　彼らに言ひ給へり
カノ者が　つかはし給ひしところの者を
汝ら　信じ込まばやとの、此事は　神のワザなり。
三〇 さるほどに、彼ら　彼に言へり
然らば　我ら　見よかし、且　汝を信ぜよかしとて、
汝！　汝は　いかなるシルシを、爲しつつありや？
何を　汝　はたらきつつありや？
三一 我らの父は　荒野に於て　マナを食へり。
それ　正しく　夙に書かれてある如し
天より出でしパンを　彼　彼らに　食ふべく與へり
三二 さるほどに、彌崇　彼らに言ひたまへり

まことに　まことに　我　汝らに言ふ
モオセは　天より出でしパンを　汝らに與へざりき、
されど　我が父は　天より出でし　眞正なる
パンを　汝らに　あたへつつあり給ふ。
三三 そは　神のパンは　天より出でて、降れるところの者、
かつ　イノチを　世に與へ居るところの者なればなり。
三四 さるほどに、彼ら　彼に向ひて、言へり
主よ！　汝　常に　このパンを　我らに與へたまへ。
三五 彼らに言ひたまへり
我！　我は　イノチのパンなり。
我が許へ來り居る者は　決して　飢うるまじ、
かつ　我を信じ込みつつある者は
もはや　決して　渴きつつあらざらん。

三六 されど　我　汝らに言へり
汝らも　また　我を見たり、
しかも　汝ら　信じつつあらず。と。
三七 父が　我に　與へ給ふところの物は
皆　我が許へ　達しつつあらん。
而も　我が許へ　來れるところの者をば、
我は　決して　ソトへ　投出だすまじ。
三八 それ　我がモノなる意を　爲し居らばやとにあらず、
されど　我を送り給ひしところの者の意をこそとて、
我　天より　くだりたればなり。
三九 で、我を送り給ひしところの者の意は　コレなり、
これ　彼が　我に與へたまひたるところの物、皆
ソの中より、我　失ふまじく、されど　最後の日に、
我　ソレを　立上がらしめつつあらんとてなり。

四〇そは　我が父の意は　コレなればなり。
これ　子を觀ぬき居る者、且　彼を信じ込み居る者は、
皆　トコシへのイノチを有ちつつあれかしとてなり。
而して　我！　我は　最後の日に、
彼を　立上がらしめつつあらんとてなり。

四一さるほどに、猶太人ら　彼について、つぶやき始めたり。それ　彼が
「我！　我は　天より出でて、降りしところのパンなり」と　言ひ給ひ
ければなり。四二而して　彼ら　言ひゐたり
此者は、我ら！　我らが　ソの者の父をも、母をも
識るところの、ヨセフの子なる彌崇にあらざるか？
今　いかにして、彼　「我は　天より出でて
くだりたり」と　言ひつつありや？

四三彌崇　答へられ、而して　彼らに言ひ給へり

汝ら　相互と偕に　つぶやきつつあるなかれ。
四四もしそれ、我を送り給ひしところの者なる父
彼を引かずば、誰も　我が許へ　來る能はず、
而も　我！　我　……　彼を
最後の日に於て、立上がらしめつつあらん。
四五豫言者に於て、夙に書かれたるものなり、
かくて　凡ての者　神の　教へられし者たらん。
父の側より　聽きし者、かつ　まなびし者は
皆　我が許へ　來りつつあり。
四六それ　神の側に在すところの者にあらざれば、
何者も　父を觀たることなし。
此者こそ　父を觀たればなり。

四七まことに　まことに、「我　汝らに言ふ

信じ居る者は　トコシへのイノチを有つ。
四八 我！　我は　イノチのパンなり、
四九 汝らの父は　荒野に於て、マナを食へり。
而して　彼ら　死に去れり。
五〇 此者は　天より出でて、降れる者なるパンなり。
これ　何者にても　彼の中より　食へかし、
而して　死に去るまじけれとてなり。
五一 我！　我は　天より出でて、降りしところの者なる、
生けるところの者なるパンなり。
もしそれ、何者にても、コのパンの中より食はば、
彼は　イツまでも　生きつつあらん。
で、しかも　我！　我　世のイノチのために、
與へつつあらんところのパンは　我が肉なり、

五二 さるほどに、猶太人ら　相互に向ひ、あらそひ始めたり、言へ
るには
いかにして、此者は　肉を食ふべく、我らに　あたへ得るか？
五三 さるほどに、彌嶺　彼らに言ひたまへり
まことに　まことに、我　汝らに言ふ
もしそれ　汝ら　人の子の肉を食はずば
かつ　彼の血を　飲まずば、
汝ら自身に於て、イノチを有ちつつあらず。
五四 我が肉を嚙緊め居る者、且、我が血を飲み居る者は、
トコシへのイノチを　もちつつあり。
而して　我！　我は　最後の日に、
彼を　立上がらしめつつあらん。
五五 そは　我が肉は　眞正のクヒモノなればなり、
また　我が血は　眞正のノミモノなればなり。

我が肉を[五六] かみしめつつある者も
我が血を のみつつある者も、
我に於て、止りつつあり。
我！ 我も 亦 彼に於て ……。
まさしく[五七] 生ける父 我を つかはしたまひ、
我！ 我も 亦 父の故に 生きつつある如く、
我を かみしめつつある者なる、カノ者も
また 我のゆゑに 生きつつあらん。
此者は[五八] 天より出でて、降りし者なるパンなり。
まさしく 父が食ひ、而して 死に去りし如くにあらず、
コのパンを かみしめつつある者は
イツまでも 生きつつあらん。

此らの事を[五九] 彼 カペルナウムに於て、教へながら、會堂に於て、言

ひたまへり。[六〇]さるほどに、彼の弟子の中より、多くの聽きし者は 言へり
むつかしきものなり、このコトバ！
誰か ソレを 聽き能ふぞや？
で、[六一]コレにつき、彼の弟子ら つぶやき居ることを、御自身に、識り給ひて、彌崇 彼らに言ひたまへり
この事 汝らを つまづかせつつありや？
然らば、[六二]もしそれ、彼が 以前、在したる處へ、
昇り居るところの、人の子を 汝ら 觀ぬきつつあらば？
……！
靈は[六三] 生かしつつあるところの物なり。
肉は 何物をも 益しつつあらず。
我！ 我が 汝らに語りたるところの詞は
靈なり、また イノチなり。

六四 されど 汝らの中の或者は 信じ居らざるところの者なり。
そは 誰が 信じ居らざるところの者であり、また 誰が 彼を付さんとしつつある者であるかを、ハジメの内より、彌崇 よく識り給ひたればなり。六五 而して 彼 言ひ居給ひたり
この故に、「もしそれ、父より 彼に與へ出されたる者に非ざれば、誰も 我が許へ 來る能はず」と
我 汝らに告げたり。

六六 此事よりして、彼の弟子の多くの者は、後の物へと往けり。而してもはや 彼と偕に あゆみつつあらざりき。六七 さるほどに、彌崇 十二の者に言ひたまへり
汝ら! 汝らも 亦 もどりたくあらずや?
六八 シモン ペツロ 彼に答へられき
主よ! 誰の許へか 我ら 往きつつあらんや?
汝は トコシへのイノチの詞を もちたまふ!
六九 而も 我ら! 我ら 信じたり、且、知りたり
それ 汝! 汝は 神の聖者なり と。
七〇 彌崇 彼らに答へられ給へり
我! 我は 汝ら十二の者を えらばざりしや?
而も 汝らの中の一(人)は 惡魔ならざるか?
七一 で、彼は イスカリオテ者の、シモンのユダを 言ひあたまひたり。
そは 十二の者の中の一(人)なる、此者は 將に 彼を付しかけ居たればなり。

第七章

一四　カリイホ節會（七の一――五三）

一さて、此らの事の後、彌崇ガリラヤに於て、歩み居たまひたり。そは猶太人ら彼を殺さんと漁り居たるを以て、彼ユダヤに於て歩みたがらず居たまひたればなり。二でも、猶太人の節會なるカリイホは近くありたり。三さるほどに、彼の兄弟ら彼に向ひて、言へり、

汝　此處より　うつれ、
而して　ユダヤへと　戻りつつあれ。
これ　汝の弟子も　亦　汝が　爲し居るところの
汝のワザを　觀ぬかばやとてなり、
四そは　誰も　隱密に於て、何をか　爲しつつあり、
而して　彼自身　大膽に於て　あらんと
あさり居らざればなり。
もし　汝　此らの事を　爲しつつあらば、
世に　汝自身を　あらはせ。
五そは　彼の兄弟すら　彼を信じ込み居たらざればなり。六さるほどに、
彌崇　彼らに言ひたまふ
我ノなる時期は　なほ未だ　到らざるなり。
でも、汝らノなる時期は　常に備はれる者なり。
七世は　汝らを　にくむあたはず、
でも、我を　にくみつつあり。
それ　我！　我は　ソレにつき、ソのワザが
アシキ物なりとのことを　立證し居ればなり。
八汝ら！　汝らは　節會にへと　のぼれ、
我！　我は　未だ　コの節會にへと　のぼらず。

それ　我ノなる時期　尙未だ滿たされたらざればなり。

で[九]、彼は　此らの事を　彼らに言ひて、ガリラヤにおいて、止まり給へり。でも[一〇]、彼の兄弟　節會にへと　のぼりしかば、さてこそ、彼自身も　亦　公然[アラハ]ならず、されど、隱密[シノビ]におけるが如く、のぼり給へり。さるほどに[一一]、猶太人ら　節會に於て、彼を　あさりはじめ、而して言ひゐたり

何處に　ありや？　カノ者！

かくて[一二]　彼に就けるツブヤキ　群衆において、夥しくありたり。げにや　或者は　言ひゐたり

彼は　善き者なり。

でも、他の者は　言ひゐたり

あらず、されど　彼は　群衆を惑はしつつあり。と。

さはさりながら[一三]、猶太人のオソレの故に、誰も　大膽[オホヤケ]に　彼について、語りゐたらず。

で[一四]、今や　節會の眞最中、彌崇　宮にへと　のぼり給へり。而して彼　教へはじめ給ひたり。さるほどに[一五]、猶太人ら　あやしみ居たり、言へるには

いかにして　此者は　文字を　識りたるか？

まなびたらざる者が！

さるほどに[一六]、彌崇　彼らに答へられ、而して　言ひたまへり

我ノなるヲシへは　我ノにあらず、

されど　我を送りたまひし者ノ。

もしそれ[一七]　誰にても、彼の意を爲さまほしくば、

ヲシへにつき、彼は　知りつつあらん、

イヅレか　神より出でしものなるか、

或は　我！　我自身より　かたりつつあるかを。

彼自身より語り居る者は　己ノなるサカエを[一八]

あさりつつあり。
でも、彼を送り給ひし者の榮光を　あさり居る者は
此者は　眞正なる者なり。
而して　不義　彼に於て　あらざるなり。
モオセは[一九]　オキテを　汝らに　あたへざりしや？
而も　汝らの中の誰も　オキテを　行じつつあらず。
などて、我を殺さんと　汝ら　あさりつつありや？
群衆[二〇]　答へられき
汝は　鬼憑キなり！
誰が[二一]　汝を殺さんと　あさりつつありや？
彌崇　答へられ、而して　彼らに言ひ給へり
一のワザを　我　爲せり
而も　汝らスベテの者、あやしみつつあり、

[二二]このゆゑに、モオセは　切禮を　汝らに與へたり。〔モオセより出でしに非ず、されど、父より出づればなり〕
而して　サバスに於て、汝ら　人を切禮へつつあり。
モオセのオキテが[二三]　ほぐされまじとて、
人　もし　サバスに於て、切禮を受けつつあらば、
それ　我　サバスに於て、人を
全き健なる者に　爲しければとて、……
汝ら　我に　にがり切りつつありや？
汝ら[二四]　面貌によりて、さばきつつある勿れ。
されど　汝ら　義しきサバキを　さばけ。
さるほどに、エルサレム出の或者は[二五]　言ひゐたり
彼らが　殺さんと　あさり居るところの者は
此者にはあらざるか？

しかも[二六] 視よ！ 彼 大膽(オホヤケ)に かたりつつあり、
而して 彼ら 何事をも 彼に言ひつつあらず、
それとも 此者は 貴德なり とのことを
長らは 眞に 知りしにあらざるか？
されど[二七] 我ら 此者を、何處よりなり、と 識れり。
でも、イッにても、貴德の 來りたまふ時、
誰も 彼の 何處よりなるかを 知りつつあらず。
さるほどに[二八]、宮に於て、敎へつつ、かつ 言ひつつ、彌崇 さけびたまへり
さて 汝ら 我を識る、かつ 我が
何處よりなるかをも 識る。
而も 我は 我自身より 來りたるにあらず、
されど 汝ら！ 汝らの識らざるところの者なる、

我を送りたまひし者は 眞正(マコト)なる者なり。
我！[二九] 我は 彼を識る。
それ 我は 彼よりの者なればなり。
而も カノ者 我を つかはし給ひければなり
さる程に[三〇]、彼ら 彼を捕へんと 漁り居たり。而も 誰も 彼の上に、
手を掛けざりき。それ 彼の時 尙未だ來りたらざればなり。[三一]でも
群衆の中より、多くの者、彼を信じ込めり。而して 彼ら言ひ居たり
イッか 貴德 來り給ふとも、此者の 爲ししところの
物よりも更に多くのシルシを 彼 爲し給はんや？
パリサイ人[三二]ら 此らの事を、彼につき、群衆の つぶやき居るを 聞
けり。而して 祭司長やパリサイ人ら 彼を 捕へばやとて、下役ら
を つかはせり。さるほどに[三三]、彌崇 言ひたまへり
なほ 少時(シバシ)、我 汝らと偕に あり、

而して　我！　我は　我を送り給ひし者の許へ戻る。
三四 汝ら　我を　あさりつつあらん。
而も　汝ら　我を　見出しつつあらざらん。
而して　我が　在る處へは　汝ら　來るあたはず。
三五 さるほどに、猶太人ら　彼ら自身に向ひて、言へり
何處へ　此者は　將に　進みかけつつありや？
それ　我ら！　我ら　彼を見出しつつあらざらんとは！
彼　將に　希臘人の離散へと　進みかけ、
而して　希臘人を數へかけつつあるに非ずや？
三六 彼が　言ひしところの、コのコトバは　何なりや？
「汝ら　我を　あさりつつあらん。
而も　汝ら　我を　見出しつつあらざらん。
而して　我が　在る處へは　汝ら　來る能はず」

三七 で、節會の大なるものなる最終日に於て、彌撒　立臨み居給ひたり、
而して　さけび給へり、言へるには
もしそれ　誰にても、かわきつつあらば、
彼をして　我が許へ　來つつあらしめよ。
而して　飲みつつあらしめよ。
三八 正しく　フミの　言ひしが如し
「我を信じ込み居る者は　彼の腹より
生ける水の河　流れ出でつつあらん」
三九 で、彼を信じ込みしところの者が　將に　受けなんとしつつありたる
ところの靈について、彼　此事を言ひたまへり。そは　彌撒　なほ未
だ　さかやかされ給はざりしかば、なほ未だ　靈も　ありたらざれば
四〇 なり。さるほどに、群衆の中より、此らのコトバを聞きし者は　言ひ
居たり
此者は　眞に　豫言者なり。

[四二]他の者は　言ひゐたり
　此者は　貴徳なり。
でも、彼らは　言ひ居たり
　そは「ガリラヤより　貴徳　出で來り給はんや？」
なればなり。
[四三]それ「貴徳は　ダギドの胤より出で、且、ダギドの
　居りたる處の村なるベスレヘムより　來り給ふ」
　とのことを　フミは　言ひしにあらずや？
[四三]さるほどに、彼のゆゑに、群衆に於て、分裂　起れり。[四四]で、彼らの中
の或者は　彼を捕へたがりゐたり。されど　誰も　彼の上に、手を
かけざりき。
[四五]さるほどに、下役ら　祭司長やパリサイ人の許へ　來れり、而して
カノ者ら　彼らに言へり

[四六]何故に　汝ら　彼を　つれ來らざりしや？
[四六]下役ら　答へられき
　未だ曾て、人　斯のごとく　語らざりき
[四七]さるほどに、パリサイ人ら　彼らに答へられき
　まあ　汝ら！　汝らも　亦　惑はされたるか？
[四八]まあ　長の中より、或は　パリサイ人の中より、
　誰とて　彼を　信じ込みしぞや？
[四九]されど、オキテを知り居らざるところの者なる
　コの群衆こそ　のろはれたる者なるなれ。
[五〇]ニコデモ　彼らに向ひて、言ふ　〔以前、彼の許へ來りしところの者、
　彼らの中の一(人)の者〕
[五一]まあ　苟且にも、まづ　彼の側より　聞かずして、
　かつ　何を　彼が　爲したるかを　知らずして、
　我らのオキテは　人を　さばきつつありや？

[五二]彼ら　答へられ、而して　彼に言へり

まあ　汝！　汝も亦　ガリラヤより出でし者なりや？

汝　さがせ、而して　視よ！

ガリラヤより　豫言者の　起り出でざることを。

[五三]かくて　彼ら　各自　ソの家へと　進めり。

第八章

一五　姦淫せし女（八の一——一一）

一で、彌崇　オリヴの山へと進みたまへり。二でも、明けがた、彼　再度、宮へと詣でたまへり。而して　民　皆　彼の許へ來はじめたり。而して　坐りたまひし彼　彼らに敎へ始めたり。三で、學者やパリサイ人ら、姦淫の際に、取押へられたる女を　つれ來り、而して　彼女を（カメ）　中央に据置きて、四彼ら　彼に言ふ

先生！　此女は　たはれ居る現場にて、取押へられたり。

五で、オキテに於て、モオセは　かほどの女性をば、石打つべく、我らに　命ぜり。

さるほどに、汝！　汝は　彼女につき、何と言ふか？

六でも、彼らは　彼を訴ふる由もがなと、彼を試み乍ら、此事を言ひゐたり。でも、下に屈みたまひし彌崇　指にて、地にへと、書きおろし居たまひたり。七でも、彼ら　彼を問ひつめて、つづけ居たりしかば、伸上りたまひし彼　彼らに向ひて、言ひたまへり

汝らの罪なき者をして、まづ、

石を　彼女に　投附けしめよ、

八また、再度、下に屈み給ひし彼、指にて、地にへと、書き居たまひたり。九で、聞きし者は、年長者より始まれる者にて、最少者に至るまで一（人）一（人）、出で來りつつありたり。かくて　彌崇のみ、のこされ

給へり。かつ　中央に居れる女も。　で、伸上り給ひし。彌崇　彼女に
言ひたまへり

女、彼ら　何處に　在りや？

誰も　汝を　とがめざりしか？

で、彼女　言へり

誰も！　主よ！

で、彌崇　言ひたまへり

では、我！　我も　汝を　とがめじ。

汝　進みつつあれ、

今より　もはや　汝　罪つくりつつある勿れ。

一六　明暗の衝突（八の一二――五九）

さるほどに、ふたたび、彌崇　彼らに語りたまへり、言へるには

我！　我は　世のピカリなり。

我に附從ひ居る者は　決して　暗に於て歩むまじ、
されど　彼は　イノチのピカリを有ちつゝあらん。
さるほどに、パリサイ人ら　彼に言へり
汝！　汝は　汝自身につき　立證しつつあり、
汝のアカシは　眞正なるものに　あらず。
彌崇　答へられ、而して　彼らに言ひたまへり
さて　我！　たとひ　我自身につき、我　立證し居るとも、
我がアカシは　眞正なるものなり、
それ　我は　何處より　來り、
また　何處へ　戻りつつあるかを　識ればなり。
でも、汝ら！　汝らは　我　何處より　來り、
或は　我　何處へ　戻りつつあるかを　識らず、
汝ら！　汝らは　肉に應じて、さばきつつあり、
我！　我は　誰をも　さばきつつあらず。

[一六]で、我！　もしそれ、我、亦　さばきつつありとも、
我ノなるサバキは　眞正なるものなり。
それ　我は　我のみ　在るにあらず、
されど　我を送り給ひし者なる父もなればなり。
[一七]で、而も　汝らノなるオキテに於て、書かれたり、
二（人）の人のアカシは　眞正なるものなり　と。
[一八]我！　我は　我自身につき、立證し居る者なり
また　我を送りたまひし者なる父も
我につき、立證しつつあり給ふ。
[一九]さるほどに、彼ら　彼に言ひ居たり
何處に　在りや　汝の父は？
彌撒　答へられたまへり
して、汝ら　我を識らず、尙亦　我が父をも。

もし　汝ら　我を　よく識りたらんには、
それ　また　我が父をも　よく識りたらんものを。
[二〇]此らの詞を　彼　宮に於て、教へながら、獻賽所において、語りたまへり。而も　誰とて　彼を捕へざりき。これ　なほ未だ　彼の時　來りたらざればなり。
[二一]さるほどに、彼　再度、彼らに言ひたまへり
我！　我は　もどりつつあり
而して　汝ら　我を　あさりつつあらん。
而も　汝らの罪に於て、汝ら　死に去りつつあらん。
我！　何處にても、我が　もどる處へは、
汝ら！　汝らは　來るあたはず。
[二二]さるほどに、猶太人ら　言ひ居たり
まあ！　彼は　彼自身を殺さんとするに非ざるか？

それ　彼は「我！　何處にても、我が　戻る處へは、
汝ら！　汝らは　來る能はず」と　言ひつつありとは！
二三 彼　また　彼らに言ひ居たまひたり
汝ら！　汝らは　下なるモノより出でしなり。
我！　我は　上なるモノより出でしなり、
汝ら！　汝らは　此世より出でしなり、
我！　我は　此世より出でしに非ざるなり。
二四 さるほどに、「汝らの罪に於て、汝ら
死に去りつつあらん」と、我　汝らに言へり
そは　もしそれ　「我なり」とのことを
汝ら　信ぜずば、汝らのツミにおいて、
汝ら　死に去りつつあるべければなり。
二五 さるほどに、彼ら　彼に言ひたり
汝！　汝は　誰なるか？

彌崇　彼らに言ひたまへり
元來、而も　我　汝らに語り居るままなり。
二六 我　汝らにつき、かたるべく、かつ
さばくべき　多くの事を　もちつつあり。
されど　我を送り給ひし者は　眞正なる者なり。
而も　我　彼の側より　聽きしところの事を
此らの事を　世にへと　我　かたりつつあり。
二七 彼が　彼らに　父を言ひゐ給ひたることを　彼ら　知らざりき。二八 さる
ほどに、彌崇　言ひたまへり
何時にても、汝ら　人の子を擧げなば、
其時、「我なり」とのことを、而も
「我は　我自身より、何事をも　爲さず、
されど　父　我に　教へたまひしごとく、

正しく　此らの事を　我　語りつつあり」
とのことを　汝ら　知りつつあらん。
[二九]而も　我を送り給ひし者　我と偕に　在し給ふ。
彼は　我のみを　のこし給はざりき。
それ　我！　我は　彼に　よみさるる事を
つねに　爲しつつあればなり。
[三〇]此らの事を　彼　語りゐたまへるや、多くの者、彼を信じ込めり。
[三一]さるほどに、彌崇　彼を信じたるところの猶太人らに向ひて、言ひ居
たまひたり
もしそれ　汝ら！　汝ら　我ノなるコトバに於て、
止まらば、眞に　汝らは　我が弟子なり。
[三二]而して　汝ら　眞理を　知りつつあらん。
而も　眞理は　汝らを　自由ならしめつつあらん。

[三三]彼ら　彼に向ひて、答へられき
我らは　アブラハムの胤なり。
而して　未だ曾て、誰にも　奴隷扱とされたらず、
いかなれば、汝！　「汝ら　自由なる者と
成りつつあらん」と　汝　言ひつつありや？
[三四]彌崇　彼らに答へられ給へり
まことに　まことに　我　汝らに言ふ
それ　罪を作り居る者は　皆　罪の奴隷なればなり。
[三五]で、奴隷は　イツまでも、家に於て、止まり居らず、
[三六]子は　イツまでも、とどまりつつあり。
さるほどに、もしそれ　子が　汝らを　自由ならしめなば、
汝らは、實際、自由なる者たるならん。
[三七]我は　汝らが　アブラハムの胤なることを識る。
されど　汝ら　我を殺さんと　あさりつつあり。

それ　我ノなるコトバ　汝らに於て居つかざればなり。
三八 我！　我は　父に侍して、視たる事を語りつつあり。
さるほどに、汝ら！　汝らも　また
父の側より、聽きし事を　爲しつつあり。
三九 彼ら　答へられ、而して　彼に言へり
我らの父は　アブラハムなり。
彌崇　彼らに言ひたまふ
もし　汝ら　アブラハムの兒ならば
汝ら　アブラハムのワザを　爲し居たるものを。
四〇 でも、神の側より　我が　聽きしところの
眞理を　汝らに語りたるところの我なる人を、
我を　今や　汝ら　殺さんと　あさりつつあり。
此事を　アブラハムは　爲さざりき。
四一 汝ら！　汝らは　汝らの父のワザを爲しつつあり。

彼ら　彼に言へり
我ら！　我らは　淫行（タハレ）より生れ出でざりき。
我らは　一（人）の父を有ちつつあり、神を。
四二 彌崇　彼らに言ひたまへり
もし　神が　汝らの父に　おはしたらば、
それ　汝ら　我を　愛しゐたるものを。
そは　我！　我は　神より出で來り、
而して　我　此處に　あればなり。
そは　我は　我自身より　來りたるにあらず、
されど　カノ者　我を　つかはし給ひければなり。
四三 何故に、汝ら　我ノなる談を　知らざるか？
それ　汝ら　我ノなるコトバを聽き能はざればなり。
四四 汝ら！　汝らは　惡魔なる父より出でし者なり
而して　汝らの父のヨクを　爲したがりつつあり、

カノ者は　ハジメより　殺人者(ヒトゴロシ)にて　ありたり。
而して　眞理に於て、立臨みたることなし。
それ　眞理は　彼において、あらざればなり。
イツにても、彼　ウソを　かたりつつある時、
彼は　己自身のモノの中より、かたりつつあり、
それ　彼は　ウソツキなればなり、
而して　ソレの父なればなり。
四五 でも　我！　我は　眞理を　言へばなり
故に　汝ら　我を信じつつあらざるなり
四六 汝らの中より、誰か　ツミにつき、
我を　あばきつつありや？
もし　我　眞理を　言ひつつあらば、
何故に　汝ら！　汝ら　我を信じ居らざるか？
四七 神より出で居る者は　神の詞を聽きつつあり、

コの故に、汝ら！　汝らは　聽きつつあらず、
それ　汝らは　神よりの出にあらざればなり。
四八 猶太人ら　答へられ、而して　彼に言へり
それ　「汝！　汝は　サマリヤ者なり、
而して　汝は　鬼憑キなり」とは
我ら！　我ら　よろしく　言ひつつあるに非ずや？
四九 彌崇　答へられたまへり
我！　我は　鬼憑キにあらず、
されど　我が父を　うやまひつつあり
而も　汝ら！　汝らは　我を　あなどりつつあり。
五〇 でも、我！　我は　我がサカエを　あさり居らず、
あさり給ふ者、かつ　さばき給ふ者　在したまふ。
五一 まことに　まことに　我　汝らに言ふ

もしそれ　誰にても　我ノなるコトバを　まもらば、
彼は　決して　イツまでも　死を　見まじ。

五二 猶太人ら　彼に言へり　今こそ　我ら　知りたり
それ　汝　鬼憑キなることを。
アブラハムは　死に去れり、亦　豫言者も。
而も　汝！　汝は　言ひつつあり
「もしそれ　誰にても　我がコトバを　まもらば、
彼は　決して　イツまでも　死を味ふまじ」
五三 まあ！　汝！　汝は　我らの父アブラハムよりも
大なる者なるか？
あれほどの者でさへ　死に去れり、
また　豫言者も　死に去れり。
汝は　汝自身を　誰と　爲しつつありや？

五四 彌崇　答へられたまへり
もしそれ　我！　我自身を　我　さかやかし居らば、
我がサカエは　無なり。
我を　さかやかし居たまふ者は　我が父なり。
ソの者を　汝ら！　汝らは　「汝らの神なり」と言ふ。
五五 而も　汝らは　彼を　知りたるにあらず、
でも　我！　我こそ　彼を　識る
而して、もしそれ　我！　「我　彼を識らず」と言はば
我は　汝らと同じ者、ウソツキたるならん。
されど　我　彼を　識る。
かつ　彼のコトバを　我　まもりつつあり、
五六 汝らの父アブラハムは　我ノなる日を
見ばやとて　興奮せり。
而も　彼は　視、かつ　よろこばされき。

五七 さるほどに、猶太人ら 彼に向ひて、言へり
汝 なほ未だ 五十歳にも 成らざるに、
而も 汝は アブラハムを 視たるか？
五八 彌崇 彼らに言ひたまへり
まことに まことに 我 汝らに言ふ
アブラハムの出現以前に、我！ 我は 在るなり。
五九 さるほどに、彼に投附けばやとて、彼ら 石を取上げけり。でも、
彌崇は かくされ、而して 宮の中より出で往きたまへり。

第九章

一七 生來の盲人（九の一——四一）

一 さて、途すがら、彼 生れ乍らの盲目の人を見給へり。二 而して 彼の
弟子、彼に問へり、言へるには
ラビ！ 誰ぞや 罪つくりしは？
此者か？ 或は 彼の親か？
三 彌崇 そも 彼が メクラで 生れしとは！
答へられたまへり
して、此者が 罪つくりしにも非ず
なほまた 彼の親にもあらず、
されど 彼に於て、神のワザの顯さればやとてなり。
四 我を送り給ひし者のワザを、日の あらんかぎり、
我ら！ 我ら はたらき居らざるべからず、
誰も 働き居る能はざるトキの夜 來りつつあり。
五 イツも 我 世に於て在る間、我は 世の光なり。
六 此らの事を言ひて、彼 地ベタに ツバキせり。而して ツバより

ドロを造り出し、かつ ドロを 彼の目の上に ぬりつけ給へり。[七]而して 彼 彼に言ひ給へり

退け、汝！ 汝 シロアムの池へと 洗ひ込め。〔ソレは「つかはされたる者」と譯さるること〕 さるほどに、彼 往けり、而して 洗へり。かつ 彼 眺めながら、來れり。[八]さるほどに、隣人 及び 以前、彼がコジキにてありたることを 視ぬき居る者 言ひはじめたり

此者は 坐り居れる者、かつ、貰ひ居れる者に非ずや？

他の者 言ひ居たり

此者なり。

他の者 言ひ居たり

決して あらず、されど 彼に似てる者なり、と。

カノ者 言ひ居たり

我！ 我なり、と。

[一〇]さるほどに、彼ら 彼に言ひゐたり

然らば いかにして、汝の目 ひらかれしや？

[一一]カノ者 答へられき

彌撒と謂はるる者なる人 ドロを造れり、

而して 我が目を ぬれり、かつ 我に言へり

汝 シロアムへと退け、而して 洗へ、と。

さるほどに、我 往きて、かつ 洗ひて、眺められき。

[一二]而して 彼ら 彼に言へり

何處に ありや、カノ者は？

彼 言ふ

我 識らず。

[一三]彼らは パリサイ人の許へ、かつて メクラなりし者なる彼を みちびきつつあり。[一四]で、サバスは 彌撒が ドロを造り、而して 彼の目

を開き給ひしところの日に於て、ありたり。[一五]さるほどに、再度、パリサイ人も亦いかにして、彼が仰ぎ視られしかと、彼へ問ひはじめたり。で、彼彼らに言へり

ドロを彼は我が目の上になすれり

而して我洗へり、而して我眺めつつあり。

[一六]さるほどに、パリサイ人の中よりの或者は言ひゐたり

此者は神の側よりの人にあらず

それ彼はサバスをまもり居らざればなり。

でも、他の者は言ひゐたり

いかにして罪人なる人がカホドのシルシを爲しあたふか？

かくて、彼らに於て、分裂ありたり。[一七]さるほどに、彼ら再度、メクラに言ふ

それ彼が汝の目をひらきしからには、

汝！汝は彼につき、何と言ひつつありや？

で、「彼は豫言者なり」と彼言へり。[一八]さるほどに、猶太人はソの仰ぎ視られしところの者なる彼の親を呼ばはりし時までも、彼はメクラにてありたるに、而も仰ぎ視られしとのことを、彼に就て、信ぜざりき。[一九]而して彼ら彼らへ問へり、言へるには

此者はメクラにて、生れしと、汝ら！

汝らが言ひ居るところの、汝らの子なりや？

然らばいかにして、唯今、彼は眺めつつありや？

[二〇]彼の親答へられ、而して言へり

此者は我らの子なりとのこと、と、

かつメクラにて、生れしことを我ら識る。

[二一]でも、いかにして、今、彼ながめつつあるかを

我ら識らず。

或は誰が彼の目を開きしかをも

我ら！我ら識らず。

汝ら　彼に問へ、彼は　オトナなり。
彼自身につき、彼自身　語りつつあらん。
[二三]此らの事を　彼の親　言へり、そは　彼ら　猶太人を　おそれ居たれ
ばなり。そは、すでに、猶太人は、もしそれ　誰にても、彼を　貴德ぞ
と　告白せば、彼は　ナカマハヅシと成るべけれと、かたく結束した
ればなり。[二三]コの故に、それ　彼は　オトナなり、汝ら　彼に問へ　と
彼の親は　言へり。

[二四]さるほどに、彼ら　メクラにてありたるところの人を　二回も呼ばは
り出せり。而して　彼に言へり
汝　サカエを　神に　ささげまつれ。
我ら！　我ら　識る　此人は　罪人なり　とのことを。
[二五]さるほどに、カノ者　答へられき
もし　彼　罪人なりとも、我　識らず、

一事を　我　識る、メクラながらの我も
唯今、ながめつつあることを。
[二六]さるほどに、彼ら　彼に言へり
何を　彼　汝に爲ししや？
いかにして、彼　汝の目を　開きしや？
[二七]彼　彼らに答へられき
我　すでに　汝らに言へり、
而も　汝ら　聽かざりき。
何を　再度、汝ら　聽きたがり居るか？
汝ら！　汝らも　亦　彼の弟子と成りたがり居るか？
[二八]かくて　彼ら　彼を　ののしれり、而して　言へり
汝！　汝は　カノ者の弟子なり、
でも、我ら！　我らは　モオセの弟子なり。
[二九]我ら！　我らは　神が　モオセに語りたまひたることを　識る。

でも、此者を！　ソの何處よりなるかを
我ら　識らず。
人[三〇]　答へられ、而して　彼らに言へり
そは　コレに於て、おどろくべき事　あればなり。
汝ら！　汝らは　彼の　何處よりなるかを識らず、
而も　彼　我が目を　ひらけりとは！
我ら[三一]　識る　神は　罪人に　聽きつつあり給はず、
されど、もしそれ、誰にても　崇神者たり、
かつ　彼の意を　行じつつあらば、
此者に　彼　聽きつつあり給ふことを。
生[三二]みつけられたるメクラの目を、誰ぞ　開きし　とのことは　イニシへより、聞き出だされざりき。
もし[三三]　此者が　神の側よりノに　在したらざれば、
彼　何をも　爲しつつあり能はざりしものを。

彼ら[三四]　答へられ、而して　彼に言へり、
汝！　全然、ツミにおいて、生まれし汝！
而も　汝！　汝　我らを　教へつつありや？
かくて　彼ら　彼を　ソトへ　投出せり。
彼ら[三五]　彼を　ソトへ　投出ししことを　彌崇　聞きたまへり。而して
彼を見出して、言ひたまへり
汝！　汝は　神の子を　信じ込みつつありや？
カノ者[三六]　答へられ、而して　言へり
さて　誰なるか？　主よ！
我　彼を　信じ込みたきに！
彌崇[三七]　彼に言ひたまへり
而も　汝　彼を　觀たり。
かつ　汝と偕に語り居る者は　カノ者なり。

で、[三八] 彼 陳べき
我 信じつつあり、主よ！
而して 彼 彼に ひれ伏せり。[三九] 彌崇 又 言ひ給へり
我！ 我は サバキにと 此世へ 來れり。
これ 眺め居らぬ者は ながめつつあれかし、
而も 眺め居る者は メクラに成れかしとてなり。
パリサイ人の中の、[四〇] 彼と偕に居るところの者、此らの事を聞けり。而
して 彼に言へり
[四一] まあ 我ら！ 我らも 亦 メクラなるか？
彌崇 彼らに言ひたまへり
もし 汝ら メクラならば、
それ 汝ら 罪を有ち居たらざるものを！
でも、今 汝ら 言ひつつあり
我ら ながめつつあり と、

汝らのツミ 止まりつつあり！

第十章

一八 良き牧者（一〇の一——二一）

[一] まことに まことに、我 汝らに言ふ
羊のカコヒへ、戸を通じて、入り來らざる者は、
されど 他處より 登りつつある者は、
カノ者は 盜人や 强盜なり。
[二] で、戸を通じて、入り來る者は 羊の牧者なり
[三] 此者には 戸モリも …… 開きつつあり。
かつ 羊は 彼の聲を 聞きつつあり。

而も　彼は　己がモノなる羊を、名に應じて、
呼ばはりつつあり、かつ　其らを連出しつつあり。
四イツにても、彼　己がモノなる凡テを放り出さば、
彼は　其らの前を　すすみつつあり。
而して　羊は　彼に　つき從ひつつあり。
それ　其らは　彼の聲を　識ればなり。
五でも　其らは　決して　他者（ヨソモノ）に附從ひつつあらざらん。
されど　其らは　彼より　にげ去りつつあらん。
それ　其らは　他者の聲を　識らざればなり。
六このタトへを　彌崇　彼らに言ひたまへり。でも　カノ者らは、彼が
彼らに語り居たるところのコトが　何にて　ありたるかを　知らざり
き。七さるほどに、彌崇　ふたたび、彼らに言ひたまへり

まことに　まことに　我　汝らに言ふ
我！　我は　羊の戸なり、
八我が前に、來りし程の凡テの者は
盜人や　强盜なり。
されど　羊は　彼らに　聽かざりき。
九我！　我は　戸なり
もしそれ　誰にても　我を通じて、入り來らば、
彼は　すくはれつつあらん、
かつ　彼は　入り來りつつあらん、
また　彼は　出で來りつつあらん、
而も　彼は　牧場を　見出しつつあらん、
一〇盜人は　これ　盜まばやな、かつ　屠らばやな、

又、亡ぼさばやな　とにあらでは、來りつつあらず。
我！　我は　これ　彼らが　イノチを有ちつつあれかしとて、
而も　彼らが　無量に有ちつつあれかしとて、來れり。

一二　我！　我は　良き者なる牧者なり。
良き者なる牧者は　ソの魂を　羊の爲に供へつつあり。
一三　牧者ならざる、而も　羊の　己がノにあらざる
ところの雇人は　來れる狼を視ぬきつつあり、
かつ　羊を置去りつつあり、而して　逃げつつあり。
而も　狼は　其らを奪ひつつあり、
而して　散らしつつあり。
一三　それ　彼は　雇人なればなり、
而して　羊につき、彼に　關係なければなり。

一四　我！　我は　良き者なる牧者なり。
且、我は　我ノを　知りつつあり、
又　我ノは　我を　知りつつあり。
一五　正しく　父　我を　知り給ふ如く、
我も　亦　父を　知りつつあり、
かくて　我　我が魂を　羊の爲に　供へつつあり。
一六　また　このカコヒの出に非ざるところの
他の羊をも　我　有ちつつあり。
カノ物をも　我　亦　導かざるべからず、
而して　其らも　我が聲を　聽きつつあらん。
かくて　一のムレ、一(人)の牧者と成りつつあらん。
一七　コの故に、父は　我を　愛しつつありたまふ

それ　我！　我は　我が魂を　供へつつあればなり。
これ、ふたたび、我　ソレを　取らばやとてなり。
誰も[一八]　ソレを　我より　取上げつつあらず、
されど　我！　我自身より　ソレを　供へつつあり。
ソレを供ふる權を　我　有ちつつあり、
我　亦、再度、ソレを取る權をも　有ちつつあり。
この命令を　我　我が父の側より　受けけり。
此らの[一九]コトバの故に、猶太人に於て、再度、分裂　起れり。で[二〇]、彼らの中の多クの者は　言ひ居たり
彼は　鬼を扱ひつつあり、而して　狂ひつつあり、
などて　汝ら　彼に聞きつつありや？
他の[二一]者は　言ひゐたり
此らは　鬼絡者(オニガラミ)の詞にあらず。

まあ　鬼が　メクラの目を　ひらき能ふか？

一九　齋宮節（一〇の二二——四二）

で[二二]、エルサレムに於て、宮キヨメ　臨めり。冬でありたり。而して[二三]
彌崇　宮に於て、ソロモンの廊に於て、歩み居給ひたり。さるほどに[二四]、
猶太人ら　彼を圍めり。而して、彼に言ひはじめたり
イツまで　汝　我らの魂を　なぶりつつありや？
もし[二五]　汝！　汝　貴德ならば　大膽(オホヤケ)に　我らに言へ。
彌崇　彼らに答へられ給へり
我　汝らに言へり、而も　汝ら　信じつつあらず。
我　我が父の名に於て、爲しつつあるところのワザは、
此らのモノは、我について、立證(アカ)しつつあり。
されど[二六]　汝ら！　汝ら　信じつつあらず。
それ　汝らは　我ノなる羊の中よりに非ざればなり。

二七 我ノなる羊は 我が聲を 聽きつつあり。
我も また 其らを 知りつつあり。
而して 其らは 我に つき從ひつつあり。
二八 我 又 トコシへのイノチを 其らに與へつつあり。
而して 其らは イツまでも、決して 亡ぶまじ、
また 何者も 我が手より 其らを 奪ひ出しつつあらざらん。
二九 我に あたへ給ひたるところの、我が父は
スベテのモノよりも、大なる者に 在したまふ。
而して 誰も 父の手より 奪ひ出すあたはず。
三〇 我と父と、我らは 一なり！

三一 猶太人ら 彼を石うたばやとて、再度、石を拾へり。
彌崇 彼らに答へられ給へり
父より出づる多クの良きワザを、我 汝らに示せり。

三二 其らの孰れのワザの故に、汝ら 我を 石うちつつあるか？
三三 猶太人ら 彼に答へられき
良きワザに就て、我ら 汝を 石うちつつあらず、
されど 冒言(ブラスヘミ)について ……
而も 汝！ 汝は 人たる者ながら、
汝自身を 神と 爲しつつあればなり。
三四 彌崇 彼らに答へられ給へり
汝らのオキテに於て、書かれてあるに非ずや？
我！ 我 言へり 「汝らは 神なり」
三五 もし 神のコトバの 臨みしところの者に向ひ、
カノ者を「神」と、彼 言ひたまひしならば、
「しかも フミは やぶられあたはず」
三六 父が 聖め給ひ、かつ 世にへと つかはし給ひし
ところの者が「我は 神の子なり」と 言ひしとて、

汝ら！　汝らは「汝　冒言(ブラスヘー)しつつあり」と　言ふか？
もし[三七]　我　我が父のワザを　爲しつつあらずば、
汝ら　我を　信じつつある勿れ、
で[三八]、もし　我　……　爲しつつありとも、
而も　それ　汝ら　我を　信じつつあらずば、
ワザにて、汝ら　信じつつあれ。
これ　父は　我に於て、かつ、我は　父に於けることを
汝ら　知れよかし、而も　知りつつあれよかしとてなり。

彼ら[三九]　再度、彼を捕へんと、あさり居たり。而も　彼は　彼らの手の
中より、出で來りたまへり。
かくて[四〇]　彼　再度、ヨルダンの彼方、最初の間、ヨハネが　禊ぎつつ
ありたる處の場處へと　往きたまへり、而して　其處に　止まり給へ
り。而して[四一]　多クの者　彼の許へ　來れり。而して　彼ら　言ひゐ
たり
げに、ヨハネは　シルシを　一も　爲さざりき、
でも、ヨハネは　此者につき、言ひしほどの
凡ての事は　眞實(マコト)にてありたり。
かくて[四二]、多クの者は　ソコにて　彼を信じ込めり。

第十一章

二〇　ラザルの蘇生（一一の一――五七）

で[一]、マリヤと、ソの姉妹マルタとの村ベタニヤより出でしラザルな
る、或る病める者ありたり。で[二]、マリヤは　香油にて、主を塗りし
者、かつ　彼女(カノ)の髪にて、彼の足を拭きし者にてありたり。ソの者の
兄弟ラザル　病みゐたり。さるほどに[三]、姉妹ら　彼の許へ……　つ

かはせり、言へるには

主よ！　見たまへ！

汝が　愛慕し給ふところの者　病みつつあり。

四 でも、彌崇　聞きしも、言ひたまへり

このヤマヒは　死に向へるに非ざるなり。

されど　神のサカエの爲に、ソレを通じて、

神の子の　さかやかさればやとてなり。

五 で、彌崇　マルタと、ソの姉妹と、ラザルとを　愛しゐたまひたり。

六 さるほどに、ソの病み居るとのコトを聞き給ひしかど、其時、彼　や

はり　ソの居給ひたる處の場處において、二日、とどまり給へり。七 こ

こに於てか、この事の後、弟子らに　彼　言ひたまふ

八 いざ　我ら　再度、ユダヤへと　つれ立たばやな！

弟子ら　彼に言ふ

九 ラビ！　今し　猶太人ら　石うたんとて　汝を　あさりゐたり。

而も　再度、汝　其處へ　もどり給ふや？

彌崇　答へられたまへり

日の時は　十二　あるにあらざるか？

もしそれ、誰にても　日に於て、歩みつつあらば、

彼　つまづきつつあらず、

それ　彼は　此世の光を　ながめつつあればなり。

一〇 でも、もしそれ　誰にても、夜に於て　歩みつつあらば、

彼　つまづきつつあり。

それ　ヒカリは　彼に於て、あらざればなり。

一一 此らの事を　彼　言ひたまへり、而して　此事の後、彼　彼らに言ひ

たまふ

我らの友ラザルは　寐込みたり。

されど　彼を覺さばやとて、我　進みつつあり。
さるほどに、弟子ら　彼に言へり
主よ！　もし　彼　寐込みたるならば、
彼　すくはれつつあらん。
でも、彌崇は　素より、彼の死について、告げたまひたり。でも、カノ者らは、眠りの寐込ミについて、言ひたまふことと　思へり。さるほどに、其時、彌崇　大膳に　彼らに言ひたまへり
ラザルは　死に去れり、
而も　汝らの故に、汝らの　信ずる爲に、
我　其處に　居たらざりしことを　よろこぶ。
されど　我ら　彼の許へ　急立たばやな！
さるほどに、「フタゴ」と謂はるる者なるトマス　相弟子らに言へり
いざ　我ら！　我らをも　亦　急立たしめよ！
いざ　我らも　彼と偕に　死に去らばやな！

さるほどに、彌崇　來り給ひて、すでに　四日、パカにおいて、納まれる彼を　見出したまへり。で、ベタニヤは　十五スタヂオほど　はなるる、エルサレムの近クでありたり。で、猶太人の中の多クの者、兄弟につき、彼女らを　なぐさめばやとて、マルタとマリヤとの許へ、とく來りたり。さるほどに、彌崇　來りつつありと聞きしかば、マルタ　彼に往き會へり。でも、マリヤは　家に於て、坐りゐたり。さるほどに、マルタ　彌崇に向ひて、言へり
主よ！　もし　汝　ココに　居たまひたらば、
それ　我が兄弟　死に去らざりしものを！
而も　それ　今、汝　神へ請ひ給ふほどの事をば、
神　汝に與へつつあり給はんことを　我　識る。
彌崇　彼女に言ひたまふ
汝の兄弟　立上りつつあらん。

[二四] マルタ　彼に言ふ

我　識る、それ　最後の日における立上りに於て

彼　立上りつつあらん　とのことを。[二五]

彌撒　彼女に言ひたまへり

我！　我は　立上りなり、而も　イノチ！

我を信じ込みつつある者は、たとひ

死に去るとも、亦　生きつつあらん。

[二六]而も　皆　生き居る者、且、我を信じ込み居る者は

決して　イツまでも、死に去るまじ。

汝　此事を　信じつつあるか？

[二七]彼女　彼に言ふ

はい！　主よ！　我！　我　信じたり。

それ　汝！　汝は　貴徳、神の子、

世にへと來り給ふところの者に　おはしたまふ！

[二八]而して　此事を言ひし彼女　去れり。かつ　ひそかに　ソの姉妹マ

リヤを呼ばはれり、言ひしには

先生　お越しなり、而して　汝を呼ばはりたまふ。

[二九]で、カノ女　聞けるや、忽ち　起され、而して　彼の許へ　來はじめ

たり。[三〇]でも、彌撒　なほ未だ　村へ入り來りたるにあらず、されど

なほ、マルタが　彼に往き會ひし處の場處に於て、居たまひたり。[三一]さ

るほどに　彼女と偕に、家に於て在るところの者、かつ　彼女を慰め

居れるところの者なる猶太人ら、マリヤをば、急に立上り、而して

出で來りしことを見て、彼女が　其處にて、泣かばやとて、パカへと

戻りつつありと思ひて、彼女に附從へり

[三二]さるほどに、マリヤ、彌撒の　在し給ひたる處へ來れるや、彼を見て、

彼の足へと打臥せり。彼に言へるには

主よ！　もし　汝　此處に　居たまひたらば、
それ　我が兄弟の　死に去らざりしものを！
三三 さるほどに、彌崇　泣き居るところの彼女と、彼女に伴ひ來りしところの者なる、泣き居るところの猶太人とを見たまへるや、彼　靈に於て、うなれり、而して　御自身を雜返(マゼカヘ)したまへり。三四 彼　また　言ひたまへり
何處に、汝ら　彼を　おきたるか？
彼ら　彼に言ふ
主よ！　汝　來りたまへ、而して　見たまへ！
三五 彌崇　落涙したまへり。三六 さるほどに、猶太人ら　言ひゐたり
視よ！　彼　いかに　彼を愛慕しゐたるかを！
三七 でも、彼らの中の或者　言へり
メクラの目を開きしところの者なる此者が、亦、
此者の　死に去らざりしやう　爲し能はざりしか？

三八 さるほどに、彌崇、再度、御自身に於て、うなり乍ら、パカヘと來りたまふ。で、ソレは　洞にてありたり。而して　石　ソの上に載せられありたり。三九 彌崇　言ひ給ふ
汝ら　石を　取除け。
果てたる者の姉妹マルタ　彼に言ふ
主よ！　彼　すでに　くさし、
四〇 そは　彼　第四（日）者なればなり。
彌崇　彼女に言ひたまふ
もしそれ　汝　信じなば、汝　神のサカエを
見つつあらん　と　我　汝に言はざりしか？
四一 さるほどに、彼ら　石を取除けり。で、彌崇　目を　上へ見上げ、而して　言ひたまへり
父よ！　我　汝に　感謝したてまつる、

それ 汝 我に 聽きたまひしことを。
四三 でも、我！ 我は 汝が つねに
我に 聽き給ふことを よく識りたり。
されど 立圍みたるところの群衆の故に
汝！ 汝 我を つかはし給ひしことを
彼ら 信ぜよかしとて 我 言へり。
四三 而して 此らの事を言ひ給ひし彼 大なる聲にて をたけびたまへり
ラザルよ！ いざ ソトへ！
四四 足と手とを 卷布にて、まかれたるところの、死にたる者 出で來れ
り。而も 彼の面は 手拭にて、よく くるまれたり。彈崇 彼らに
言ひたまふ
汝ら 彼を ほどけ、而して 彼を 戻らしめよ。

四五 さるほどに 猶太人の中の多クの者、マリヤの許へ來りし者にて、而
も 彼の 爲し給ひし事を視ぬきし者は、彼を信じ込めり。四六 でも、彼
らの中の或者は パリサイ人の許へ往けり。而して 彈崇の 爲し給
ひし事を 彼らに言へり。四七 さるほどに、祭司長やパリサイ人ら 議會
を召集せり。而して 彼ら 言ひゐたり
何を 我ら 爲しつつあるか？
それ 此なる人 多クのシルシを爲しつつありとは！
四八 もしそれ 我ら 彼を このままに さしおかば、
スベテの者 彼を 信じ込みつつあらん、
また 羅馬人も 來りつつあらん、
而して 彼ら 取上げつつあらん
我らより 場處をも、國人をも！
四九 でも、彼らの中の或る一(人)、 カノ年の祭司長たるカヤバ 彼らに

言へり

汝ら！　汝ら　何事をも　識らず。

五〇 でも、人　一(人)　民の爲に　死に去りなば、

而して　國人全部　ほろび去らずば、それ

汝らに益しつつあり　と、汝ら　慮りつつあらず。

五一 でも、此事を　彼　己自身より言ひしにあらず、されど　カノ年の祭

司長たる者なれば、彌撒が　國人のために、將に　死に去りかけ居た

まひたることを　彼　豫言せり、五二 而も　これ　國人の爲のみならず、

されど、また　撒散らされたるところの者なる、神の兒らをも、彼

一にへと　集めよかしとのことをも。五三 さるほどに、カノ日より、彼ら

彼を殺さばやと　協議せり。

五四 さるほどに、彌撒　もはや　大膽(オホヤケ)に、猶太人(間)において、歩みゐ

たまはず、されど　其處より、荒野の近クなる地方へと、「エフライ

ム」と云はるる町へと　往きたまへり。而して　彼　其處に、弟子と

偕に、とどまりたまへり。五五 で、猶太人のスギコシ　近クありたり。而

して　多クの者、彼ら自身を　きよめばやとて、スギコシの前に、地

方より出でて、エルサレムへと、のぼれり。五六 さるほどに、彼ら　彌撒

を　あざり居たり。而して　宮に於て、立臨みたる者、相互と偕に

言ひゐたり

何と　汝らに　おもはるるか？

それ　節會にへと、彼　決して　來るまじきか？

五七 で、祭司長やパリサイ人ら、いかにもして、彼を押へばやとて、とく

命令を與へたり――もしそれ、誰にても　彼　何處に在るかを知ら

ば　密告せよかし　と。

第十二章

二一　ベタニヤにおける受膏（一二の一——一一）

一さるほどに、彌撒が　死ねる者の中より、起し給ひしところのラザルの居たる處、ベタニヤへと、スギヨシの六日前、二彌撒　來りたまへり。さるほどに、彼ら　其處にて、彼に　晩餐を催せり。而して　マルタつかへゐたり。でも、ラザルは　彼に伴ひ、陪席せる者の中の一（人）にてありたり。三さるほどに、高價なる純粹なナルドの香油一リツルを取りし。マリヤは、彌撒の足を塗れり。而して　彼女の髮にて、彼の足を拭へり。で、家は　香油の發する香にて、滿たされぬ。四で、彼の弟子の一（人）、まさに　彼を付しかけつつあるところの者なるイスカリオテ者ユダ　言ふ

五何故に、この香油が　三百デナリで　賣られ、而して　貧しき者に　あたへられざりしか？

六でも、貧しき者につき、彼には　氣がかり居たるにあらず、されど、彼は　ヌスビトにてありたれば、而も　財布を持てる者にて、押込まれあるところの物を携へゐたればこそ、彼　此事を言へり。七さるほどに、彌撒　言ひたまへり

汝　彼女を　かまふなかれ！　これ

我が葬リの日にへと、彼女　ソレを守りしものを！

八そは　貧しき者をば　汝ら　常に　汝らと偕に　有ちつつあり、

でも、我をば　汝ら　常に　有ちつつあらざればなり。

九さるほどに、猶太人の中よりの夥しき群衆、其處に　彼の居たまふことを知れり。而して、ただに　彌撒の故のみならず、されど　亦、死ねる者の中より、彼が　起し給ひしところのラザルをも見ばやとて、

彼ら　來れり。[一〇]でも、祭司長らは、また　ラザルをも殺し居らばやと協議せり。[一一]それ　猶太人の多クの者は、彼の故に、退きつつありたり、而して　彌崇を信じ込みゐたればなり。

二二　彌崇の御入城（一二の一二――一九）

[一二]明くる（日）に、節會にへと來りしところの者なる、夥しき群衆、彌崇が　エルサレムへ來りつつあり給ふと聞きて、[一三]棕梠の枝を取れり。而して　彼に　お出迎ヒをぞと、彼ら　出で來れり。而して　彼らをたけび居たり

ホサンナ！　祝されたる者！
主の名に於て、來り給ふ者！
而も　イスラエルの王！

[一四]で、彌崇　小驢馬を見出して、其上に坐りたまへり。まさしく、書かれありたるが如し

[一五]汝　おそれつつある勿れ、シオンの娘よ！
視よ！　汝の王　驢馬の仔の上に坐りて、來り給ふ！

[一六]此らの事を、最初、彼の弟子らも　知らざりき。されど　彌崇　榮やかされ給ひし時、其時、此らの事が、彼の上に、書かれありたることと、而も　此らの事を　彼らが　彼に爲せりとのこととを、彼ら　おもひおこされり。

[一七]さるほどに、彼が　ラザルを　ハカより呼ばはり出し、而して　彼を死ぬる者の中より起したまひし時、彼と偕に居りしところの者なる群衆　立證しゐたり。[一八]この故に、群衆も　亦　彼に往き會へり。それ彼が　このシルシを爲し給ひたるを　彼ら　聞きければなり。[一九]さるほどに、パリサイ人ら　彼ら自身に向ひて、言へり
汝ら　何をも　益し居らざることを
汝ら　視ぬきつつあり、

視よ！ 世は 彼の後に赴けり。

二三 時來る（一二の二〇——五〇）

[二〇]で、節會に於て、をがまばやと、のぼり居る者の中の或る希臘人ありたり。[二一]さるほどに、此らの者、ガリラヤのベスサイダよりの者なるところのピリポに向ひ來れり。而して 彼へ問ひ始めたり、言へるには

主よ！ 我ら 彌撒を見まほしきなり。

[二二]ピリポ 來り、而して アンヅレに言ふ。アンヅレとピリポと 來り、而して 彼ら 彌撒に言ふ。[二三]で、彌撒 彼らに答へたまふ。言ひ給ふには

人の子の 榮やかさるべき時 來りたり。

[二四]まことに まことに 我 汝らに言ふ。

もしそれ 麥の粒 地へ落込みて、死に去らずば、

ソレは ただ ソノまま のこりつつあり、

でも、もしそれ ソレが 死に去らば、

ソレは 夥しき果を むすびつつあり。

[二五]彼の魂を愛慕し居る者は ソレを亡ぼしつつあり、

而も 此世において、彼の魂を憎み居る者は、

トコシヘのイノチにへと、ソレを衞りつつあらん。

[二六]もしそれ 誰にても 我に事へ居らば、

彼をして 我に 附從ひ居らしめよ。

而して 何處にても 我が 在る處へは、

我ノなる給仕も 亦 其處に 在るならん。

もしそれ 誰にても 我に 事へ居らば、

父 彼を うやまひつつあらん。

[二七]今や 我が魂は まぜかへされたり。

また 我 何をか 言ふべきぞや？

父よ！　我を　この時より救ひ出し給へ　か？
されど　この故に、我　この時にへと、來れり！
二八 父よ！　汝の名を　さかやかしたまへ。
さるほどに、聲　天より出で來れり、
而も　我　さかやかせり
また　再度、我　榮やかしつつあらん。
二九 さるほどに、立臨みたるところの者なる、かつ　聞きしところの者なる群衆　言ひゐたり
カミナリ　おこりたり！
他の者　言ひゐたり
ツカヒ　彼に語りたり！
三〇 彌崇　答へられ、而して　言ひたまへり
我の故に　この聲　起りたるにあらず、
されど　汝らのゆゑに！

三一 今や　この世のサバキ　あり、
今や　この世の長は　ソトへ投出されつつあらん。
三二 而も　我！　もしそれ　我　地の中より擧げられなば、
我　凡テの者を　我自身の許へ　引寄せつつあらん。
三三 で、いかなる死にて、彼　まさに　死に去りかけ居給ひたるかを諷して、彼　此事を言ひ居給ひたり。三四 さるほどに、群衆　彼に答へられき
我ら！　我らは　オキテの中より聞けり
それ、「貴德は　イツまでも　ながらへ給ふ」と。
而して　いかなれば、汝！　汝は　言ひたまふか？
それ、「人の子は　あげられざる可らず」と。
コの、「人の子」とは　誰なるか？
三五 さるほどに、彌崇　彼らに言ひたまへり
なほ　少時、ヒカリは　汝らに於て　あり。

ヤミ　汝らを　おほはざらめやと
汝ら　ピカリを　有てる限り、歩みつつあれ
而も　ヤミにおいて、あゆみつつある者は、
何處へ　もどりつつあるかを　識らず。
三六 汝ら　ピカリを有てる限り、ヒカリの子と
成らばやとて、ピカリを信じ込みつつあれ。
此らの事を　彌榮　かたりたまへり。而して　往きて、彼らより、か
くされ給へり。

三七 で、それほどのシルシを、彼らの前にて、彼　爲し給ひたるに、彼ら
彼を信じ込みゐたらず、三八 豫言者イザヤの言ひしところのコトバの
成就せらればやとてなり
主よ！　誰か　我らのオトヅレに信頼せしや？
また　主のウデは　誰にと　捲られしや？

三九 この故に、彼ら　信じ居たる能はざるなり。それ　ふたたび、イザヤ
言ひければなり
四〇 彼　彼らの目を　メクラにしたり。
また　彼らの心を　胼胝にせり。
これ　彼ら　目にて　見じ　且　彼ら　心にて解せじ、
また　彼ら　ひるがへらじ、
而して　我　彼らを癒やしつつあらざらんとてなり。

四一 此らの事を　イザヤ　言へり。それ　彼は　彼のサカエを見しかば、
かく　彼について、語れり。四二 さはさりながら、而も尙、長の中の多ク
の者は　彼を信じ込めり。　されど　パリサイ人の故に、ナカマハヅ
シと成るまじとて、彼ら　告白し居たらず。　四三 そは　神のサカエよ
りも、むしろ、彼らは　人のサカエを　更に　愛しければなり。

四四で、彌嶺　さけび、而して　言ひたまへり

我を信じ込み居る者は　我を信じ込みつつあるに非ず、

されど　我を送り給ひしところの者を。

四五また　我を視ぬき居る者は、

我を送り給ひしところの者をも視ぬきつつあり。

四六我！　我は　世にへと來りたるヒカリ！

これ　我を信じ込み居る者は　皆

ヤミにおいて、とどまらじとてなり。

四七また、もしそれ　誰にても、我が詞を聞き、

かつ　まもらざるとも、

我！　我は　彼を　さばかじ。

そは　世を　さばきつつあらばやとて、

我　來りしにあらず、

されど　世を救はばやとてなりければなり。

四八我を居去（キヂ）らし居る者、亦　我が詞を受け居らざる者は

彼を　さばき居る者を　有ちつつあり、

我が語りしところのコトバ！　カノ者

最後の日に於て、彼を　さばきつつあらん。

四九我！　それ　我は　我自身より語り出ししに非ず、

されど　我を送りたまひし父！

彼　我が　何を　言ふべく、また

我が　何を　語るべきか　との命令を

彼御自身　我に　あたへ給ひだればなり。

五〇而して　我　識れり

それ　彼の命令は　トコシへのイノチなることを。

さるほどに、我！　我が　語るところの事は

まさしく　父　我に告げ給ひたるごとく、

しか　我　かたりつつあり。

第十三章

二四　最後の晩餐（一三の一――三八）

一で、彌崇、スギュシの節會の前に、此世より出でて、父の許へ移るべき、彼の時　來りしことを識りて、世におけるところの、己が者を愛して、終りまで、彼らを愛したまへり。二かくて　晩餐と成りて、惡魔すでに、シモンの（子）なるイスカリオテ者ユダが、彼を付さめと、心に打込みたれば、三凡テの物を、父が　彼に、手にへと與へ給ひたることと、彼が　神より出で來り、かつ　神の許へ戻りつつあることとを識り給ひて、四彼　晩餐の中より起上り、而して上衣を脱ぎ、また手拭を取りて、御自身を纏ひたまへり。五次に、彼　水を　盥へ注込みたまひ、而して　弟子らの足を洗ひ、かつ　纏はれてありたるところの手拭にて、拭ひ始めたまへり。六さるほどに、彼　シモン　ペツロの許へ來りたまふ。彼　彼に言ふ

主よ！　汝！　汝は　我が足を洗ひたまふか？

七彌崇　答へられ、而して　彼に言ひたまへり

我！　我が　爲し居るところの事を

汝！　汝は　唯今、識らず、

でも、此らの事の後、汝　知りつつあらん。

八ペツロ　彼に言ふ

汝　イツまでも、決して　我が足を

あらひたまはざらんことを！

彌崇　彼に答へられたまへり

もしそれ　我　汝を洗はずば、

汝　我と偕に　分を有ちつつあらず。

九シモン　ペツロ　彼に言ふ

主よ！　ただに　我が足のみならず、
されど　また　手をも、頭をも。
一〇 彌撒　彼に言ひたまふ
浴したる者は　足のホカ、洗ふべき必要を有せず、
されど　彼は　全部　きよき者なり。
而も　汝ら！　汝らは　きよき者なり、
されど　決して　スベテの者ならず。
一一 そは、彼を付しつつあるところの者を　彼　よく識りたまひたればなり。この故に、「汝ら　スベテの者　決して　きよき者にあらず」と
彼　言ひたまへり。

一二 さるほどに、彼　彼らの足を洗ひ、而して　彼の上衣を取りたまひし時、彼　ふたたび　ねまり、而して　彼らに言ひたまへり
何を　我　汝らに爲したるかを、汝ら　知りつつありや？

一三 汝ら！　汝ら　我を　「先生」　または
「主」と呼ばはりつつあり、
而も　汝ら　よろしく　言ひつつあり、
そは　我　さ　あればなり。
一四 さるほどに、我！　主たり、且、先生たる我、
もし　汝らの足を　あらひしならば、
汝ら！　汝らも　亦　相互の足を洗ふべき筈なり。
一五 そは　我！　我　まさしく　汝らに爲しし如く、
これ　汝ら！　汝らも　亦　爲しつつあれかし
と　我　汝らに　例を與へたればなり。

一六 まことに　まことに　我　汝らに言ふ
奴隷は　彼の主よりも　大なる者にあらず、
尙亦　使者は　彼を送りし者よりも大なる者ならず。

もし[一七] 汝ら 此らの事を 識らば、
もしそれ 汝ら 同じ事を爲しつつあらば、
汝らは サイハヒなる者なり。
汝らの凡テの者について、我 言ひつつあらず、[一八]
我！ 我 我が 選びしところの者を 識れり。
されど、これ 「我がパンを咀み居る者
我の上に、彼のクビスを 擧げけり」
とのフミの 成就せられればやとてなり。
ソの發る前に、唯今より、我 汝らに言ひつつあり、[一九]
これ イツにても、ソの發りし時、それ 「我は さ なり」との
ことを 汝ら 信ぜよかしとてなり。
まことに まことに 我 汝らに言ふ[二〇]
もしそれ 誰にても 我が送りし者を
受け居る者は 我をも 受けつつあり、
で、我を受け居る者は 我を送り給ひし者
をも受けつつあり。

此らの事を言ひたまひて、彌崇 靈にては まぜかへされ給ひしに、[二一]
而も 彼 立證し、且、言ひたまへり
まことに まことに 我 汝らに言ふ
それ 汝らの中の一(人) 我を付しつつあらん。
誰につき、彼 言ひつつあり給ふかと、まごつき居る弟子ら、相互を[二二]
眺め込みゐたり。彼の弟子の中の 一(人)、彌崇の愛しゐ給ひたるとこ[二三]
ろの者、彌崇のフトコロに於て、もたれかかれる者ありたり。さるほ[二四]
どに、シモン ペツロ 此者に うなづき、而して 彼に言ふ
彼の 言ひたまふところの者につき、
「誰なるか？」と 汝 言へ。
かやうに、彌崇の胸の上に、すりつきしまま、カノ者 彼に言ふ[二五]

主よ！　誰なるか？
さるほどに、彌崇　答へたまふ
我！　我　一ツマミを　浸しつつあらん、
而して　我　彼に　あたへつつあらん
ところの者は　カノ者なり。
さる程に、彼　一ツマミを浸して、取り、而して　イスカリオテ者シモンの（子）なるユダに與へ給ふ。而して　一ツマミの後、其時、サタン　カノ者へ　入り込み來れり。さる程に、彌崇　彼に言ひたまふ
汝　爲しつつあるところの事を　ヨリ速に　爲せ。
でも、席に著ける者の誰も、彼　此事を　何に向つて、彼に言ひたまひしかを知らざりき。そは　或者は、ユダが　財布を持ちゐたりしかば、彌崇　彼に、節會にへとか、或は　貧しき者にとか、何か　彼が與へばやとて「我らが　必要を有てるところの物を、汝　買へ」と、言ひたまふことと　おもひゐたればなり。さるほどに、カノ者　一ツ

マミを受けて、たちまち　出で來れり。でも、夜にてありたり。
さるほどに、彼　出で來りし時、彌崇　言ひたまふ
今や　人の子　さかやかされたり。
神も　亦　彼に於て、榮やかされ給へり。
且、神は　御自身に於て、彼を榮かしつつあらん。
而も　彼は　たちまち　彼を榮かしつつあらん。
幼兒らよ！　なほ少（時）、我　汝らと偕に　在り、
汝ら　我を　あさりつつあらん、
而も　まさしく、それ
「我！　何處にても、我が　もどる處へは
汝ら！　汝ら　來るあたはず」と、
我　猶太人に言ひしごとく
唯今、我　亦　汝らにも　言ひつつあり。

[三四]新しき命令を　我　汝らに與へつつあり、
これ　汝ら　相互を愛しつつあれかしとてなり。
まさしく　我　汝らを愛せしごとく、
これ　汝らも　亦　相互を愛しつつあれかしとてなり。
[三五]もしそれ　汝ら　相互に於て、愛を有ちつつあらば、
コレに於て、汝ら　我に　弟子たる者なり。
とのことを　スベテの者は　知りつつあらん。

[三六]シモン　ペツロ　彼に言ふ
主よ！　何處へ　汝　もどりたまふか？
彌崇　答へられ給へり
何處にても、我が　もどる處へは、
今、汝　我に　つき從ふあたはず、
でも、後ほど、汝　つき從ひつつあらん。

[三七]ペツロ　彼に言ふ
主よ！　何故に　唯今、我　汝に附從ひ能はざるか？
我が魂をも　我　汝の爲に　供へつつあらん。
[三八]彌崇　答へたまふ
汝の魂を　我が爲に、汝　供へつつあらんとや？
まことに　まことに　我　汝に言ふ
けだし、汝　三度、我を否みつつあらん迄は、
雞　決して　鳴かざらん！

第十四章

二五　彌崇の御別辭（一四の一——三一）

[一]汝らの心をして、雜返されつつあらしむる勿れ。

汝ら　神を信じ込みつつあれ。
また　我をも信じ込みつつあれ。
二 我が父の家に於て、多くのスマヒあり。
で、もし　無かりせば、我　汝らに言ひしものを。
それ　汝らに、處を整へに、我　進みつつあればなり。
三 而して　もしそれ　我　すすまば、
而して　汝らに　處を整へなば、再度、我　來り、
而して　汝らを　我自身の許へ　引取りつつあらん。
これ　何處にても　我が　在る處には、
また　汝らも　在れよかしとてなり。
四 而して　何處にても　我が戻る處、汝ら　道を識る。
五 トマス　彼に言ふ
主よ！　汝　何處へ戻り給ふかを　我ら　識らず、

六 彌崇　彼に言ひたまふ
我！　我は　道、且、眞理、又　イノチなり。
誰も　我を通ぜざれば、父の許へ　來らず
七 もし　汝ら　我を　よく知りたらば、
また　それ　我が父をも　よく識りたるものを。
唯今より　汝ら　彼を知りつつあり、
而も　汝ら　彼を　觀たり。
八 ピリポ　彼に言ふ
主よ！　汝　我らに　父を　示したまへ。
而も　それ　我らに　足る！
九 彌崇　彼に言ひたまふ
かほど久しく、我　汝らと偕に　在り。

而も　汝　我を知りたらざるか？　ピリポ！
我を觀たる者は　父をも　觀たり。
いかにして　汝！　汝　言ひつつありや？
「汝　我らに　父を　示したまへ」
一〇 我は　父に於て、且、父は　我に於て　在す
ことを　汝　信じつつあらざるか？
我！　我が　汝らに言ふところの詞は
我自身より　かたりつつあらず、
でも、我において、止まり居たまふ父
彼のワザを　爲しつつありたまふ。

一一 汝ら　我を　信じつつあれ、
それ　我は　父に於て、又　父は　我に於けることを、
で、さもなくば、ワザ其らのモノの故に、

汝ら　我を　信じつつあれ。
一二 まことに　まことに　我　汝らに言ふ
我を信じ込み居る者は、かノ者も　亦
我が　爲し居るところのワザを　爲しつつあらん。
而も　此らよりも大なる事を　彼　爲しつつあらん。
それ　我！　我　父の許へ　進みつつあればなり。
一三 亦　何にても、それ　汝ら　我が名に於て、求めなば、
我　ソレを　爲しつつあらん。
これ　父は　子に於て、榮やかされ給はめとてなり。
一四 もしそれ、何にても、汝ら　我が名において、
我に求めなば、我　コレを　爲しつつあらん。
一五 もしそれ、汝ら　我を　愛しつつあらば、
我ノなる命令を　汝ら　守りつつあらん。
一六 而も　我！　我は　父へ　請ひつつあらん、

而して　彼　他の守護靈(パラクレト)を　汝らに　あたへつつあり給はん。
これ　汝らと偕に　イツまでも　ソの　在さばやとてなり。
[一七]眞理の靈！　世は　受け能はざるところの物！
それ　……　ソレを　觀ぬき居らざればなり。
なほまた　ソレを　知りつつあらざればなり。
汝ら！　汝らは　ソレを　知りつつあり、
それ　ソレが　汝らの側に止りつつあり給へばなり。
而も　ソレが　汝らに於て、在すべければなり。
[一八]我　汝らを　孤兒として、のこしつつあらざらん。
我　汝らの許へ　來りつつあり、
[一九]なほ少(シバシ)(時)、而も　世は　もはや　我を　觀ぬきつつあらず、
でも、汝ら！　汝らは　我を　觀ぬきつつあり、
それ　我！　我は　生きつつあればなり。
汝ら！　汝らも　亦　生きつつあるべければなり。
[二〇]カノ日に於て、それ　我は　我が父に於て、
かつ　汝らは　我において、また
我は　汝らに於けることを　汝ら　知りつつあらん。
[二一]我が命令を有ち居る者、且、其らを守り居る者、
カノ者は　我を愛し居る者なり。
で、我を愛し居る者は、我が父によりて、愛されつつあらん、
我！　我も　亦　彼を　愛しつつあらん、
而も　我　我自身を　彼に　あらはしつつあらん。

[二二]ユダ（イスカリオテ者ならぬ）彼に言ふ
主よ！　何事の　おこりたるにぞ？
それ「汝　まさに　汝自身を　我らに　あらはしかけつつあり、
而も　世にはあらず」とは？

[二三]彌榮　答へられ、而して　彼に言ひたまへり
もしそれ　誰にても、我を　愛しつつあらば、
彼　我がコトバを　まもりつつあらん、
かつ　我が父　彼を　愛しつつあらん。
また　彼の許へ、我ら　來りつつあらん、
而して　彼の側に、我ら　スマヒを爲しつつあらん。
[二四]我を愛し居らざる者は　我がコトバを守りつつあらず、
而も　汝ら　聽き居るところのコトバは　我ノに非ず、
されど　我を送りたまひしところの父ノなり。

[二五]我　汝らの側に　とどまり居りて、
此らの事を　汝らに　かたりたり。
[二六]で、守護靈！　聖きモノなる靈！
父　我が名に於て、送り給はんところの物！
カノ者　汝らへ　凡テの事を　敎へつつあり給はん。
而も　我が　汝らに言ひしところの凡テの事を、
[二七]彼　汝らをして、憶ひ起さしめつつあり給はん。
平和を　我　汝らに　のこしつつあり、
我ノなる平和を　我　汝らに　與へつつあり、
而も　世の　與へつつある如きにあらざるを、
我！　我は　汝らに　あたへつつあり。
汝らの心をして、雜返さしめられつつある勿れ。
なほまた、おぢけしめられつつあるなかれ、
[二八]「我　戻りつつあり、又　汝らの許へ來りつつあり」
と、我が　汝らに言ひしことを　汝ら　聞けり。
もし　汝ら　我を　愛しゐたるならば、
父の許へ、我が　進みつつあることを、
それ　汝ら　よろこばされしものを。

それ　父は　我よりも　大なる者なればなり。

[二九]今、又、ソの發りし前に、我　汝らに告げたり。

これ　イツにても、ソの發りし時、

汝ら　信ぜよかしとてなり。

[三〇]もはや　多クの事を　我　汝らと偕に　語らざらん。

そは　世の長　來りつつあればなり。

而も　我に於て、彼　何をも　有たざればなり。

[三一]されど　我　父を　愛しつつあり、

かつ　父　我に命じたまひしごとく、

まさしく　我　かく　爲しつつあることを

これ　世の　知れよかしとてなり。

汝ら　起き上れ！

いざ　我ら　此處より　つれ立たばやな！

第十五章

二六　彌崇は葡萄樹（一五の一——二七）

[一]我！　我は　眞正なる葡萄樹なり。

而して　我が父は　農夫なり。

[二]我に於て　果を結び居らぬ枝をば、

彼は　皆　ソレを　取除きつつあり

而も　果を結びつつあるノをば、

彼は　皆　ソレを　つばへつつあり。

これ　ヨリ多クの果を結び居らしめばやとてなり。

[三]我が　汝らに語りたるところのコトバの故に、

すでに・汝ら！　汝らは　淨き者なり。

四 我において、汝ら　とどまれ、

我も　また　汝らにおいて　……。

もしそれ　枝　葡萄樹において、とどまらずば、

まさしく　其自身より　果を結び能はざる如く、

もしそれ　汝らも　我において、とどまらずば、

汝ら！　まさしく　汝らも　……　じ！

五 我！　我は　葡萄樹なり。

汝ら！　汝らは　枝。

我に於て、且、我　彼に於て、とどまり居る者は、

此者は　おびただしき果を　むすびつつあり。

それ　我を離れて、汝ら　何事をも、

爲しつつあり能はざればなり。

六 もしそれ、誰にても、我に於て、とどまらずば、

枝の如く、彼　ソトへ投げられ、而して　枯らさる。

而も　彼ら　其らを　集めつつあり、

かつ　彼ら　火にへと　投込みつつあり、

而して　其らは　燒かれつつあり。

七 もしそれ、汝ら　我において、とどまらば、

また　我が詞　汝らにおいて、とどまらば、

もしそれ、何をか　汝ら　欲するところの

モノあらば、汝ら　もとめよ。

而も　それ　汝らに　成りつつあらん。

八 コレに於て、我が父　さかやかされたまへり。

これ　汝ら　夥しき果を結びつつあればこそ、

而も　汝ら　我に　弟子と　成りつつあらん。

九 まさしく 父 我を 愛し給ひしごとく、
我も また 汝らを 愛せり。
我ノなる愛に於て、汝ら とどまれ。
一〇 もしそれ、汝ら 我が命令を まもらば、
汝ら 我が愛に於て、とどまりつつあらん。
まさしく、我！ 我 我が父の命令を守りたり、
而して 彼の愛に於て、我 とどまりつつある如し。
一一 此らの事を、我 汝らに かたりたり。
これ 我ノなるヨロコビ 汝らに於て、あれよかし、
また 汝らのヨロコビ 滿たされよかしとてなり。
一二 コレぞ 我ノなる命令なり、
これ まさしく 我 汝らを 愛せしごとく、

汝らも 相互を 愛しつつあれよかしとてなり。
一三 誰にても、ソの友の爲に、ソの魂を 供へばやとの、
コレよりも大なる愛を 誰も 有ちつつあらず。
一四 もしそれ 我 汝らに命じ居るところの事を
汝ら 爲しつつあらば、汝ら！ 汝らは 我が友なり。
一五 もはや 我 汝らを 「奴隷」と 言ひつつあらず、
それ 奴隷は ソの主が 何を
爲しつつあるかを 識らざればなり。
で、汝らを 我 「友」と 稱したり。
それ 我が父の側にて、聽きしところの凡テの事を
我 汝らに 知りぬかしめければなり。
一六 汝ら！ 汝ら 我を 選びしにあらず、

されど 我！ 我 汝らを えらべり。
而して 我 汝らを 据ゑおけり。
これ 汝ら！ 汝ら 戻りつつあれかし、
かつ 汝ら 果を むすびつつあれかし、
また 汝らの果の 止まりつつあれかしとてなり。
これ 何にても、それ 汝ら 我が名において、
父へ もとむるところの物をば、
彼 汝らに 與へ給はめとてなり。
一七 此らの事を 我 汝らに 命じつつあり、
これ 汝ら 相互を愛しつつあれよかしとてなり。
一八 もし 世が 汝らを にくみつつあらば、汝ら
知りつつあれ、汝らよりも前に、我を憎みたることを。
一九 もし 汝ら 世の中よりノならば、

それ 世は 己がモノを 愛慕しゐたるに、
でも、それ 汝らは 世の中よりノにあらず、
されど 我！ 我 汝らを
世の中より えらび出しければなり。
この故に 世は 汝らを にくみつつあり。
二〇 「奴隷は ソの主よりも大なる者にあらず」と
我 汝らに言ひし所のコトバを 汝ら 覺え居れ。
もし 彼ら 我を 狩り立てしならば、
また 汝らをも 狩り立てつつあらん。
もし 彼ら 我がコトバを まもりしならば、
また 汝らノをも まもりつつあらん。
二一 されど 此ら凡テの事を 我が名の故に、
汝らへも 彼ら 爲しつつあらん。

それ　彼ら　我を送り給ひし者を　識らざればなり。
二二もし　我　來り、而して　彼らに語らざりしならば、
彼らは　ツミを　有ちゐたらざるものを！
でも、今、ソの罪につき、彼らは　口實(カコツケ)を有せず！
二三我を憎み居る者は、亦　我が父をも　憎みつつあり、
二四誰も　他の者の　爲さざりしところのワザを、
もし　我　彼らにおいて、爲さざりしならば、
彼らは　ツミを　有ちゐたらざるものを！
でも、今、而も　彼ら　觀ぬきたり、
而して　にくみたり、我をも、亦　我が父をも。
二五されど、これ　彼らのオキテにおいて、
「彼ら　徒に、我を　にくめり」と　書かれたる
ところのコトバの　成就せられればやとてなり。

二六で、イツにても、父の側より　我！
我　汝らに送りつつあらんところの者なる、
父の側より、進み出でつつあるところの物なる、
眞理の靈なる守護靈　來りたまはば、
カノ者　我について、立證しつつあらん。
二七で、汝ら！　汝らも　亦　立證しつつあれ、
それ　汝ら　ハジメより　我と偕に　あればなり。

第十六章

二七　彌崇の御遺訓（一六の一——三三）

一此らの事を　我　汝らに　かたりたり。

これ　汝ら　つまづかされまじとてなり。
二 彼ら　汝らを　ナカマハヅシと　爲しつつあらん、
されど　汝らを殺しし者は、皆　これ
神に　供養すると　おもへる時、來りつつあり。
三 而して　此らの事を　彼ら　爲しつつあらん、
それ　彼らは　父をも我をも　知らざればなり。

四 されど　此らの事を　我　汝らに　かたりたり
これ　イツにても、其らの事の時　來りなば、
我！　我　汝らに　言ひしことを——
其らの事を　汝ら　おぼえつつあれかしとてなり。
でも、此らの事を　ハジメより
我　汝らに　言ひ出さざりき、
それ　我　汝らと偕に　ありたればなり。

五 で、今、我　我を送り給ひし者の許へ　戻りつつあり、
而して　汝らの中より誰も　我へ　問ひつつあらず、
「何處へ　汝　もどり給ふか？」
六 されど　此らの事を　我　汝らに語りしかば、
カナシミ　汝らのコヽロを　みたしたり。
七 されど　我！　我　眞理を　汝らに言ふ
我！　これ　我　往けばこそ、それ　汝らに益す。
そは　もしそれ　我　往かざらんか、
守護靈　汝らの許へ　來り給はざるべければなり。
でも、もしそれ　我　進み往かば、
我　彼を　汝らの許へ　送りつつあらん。
八 而も　カノ者　來りたまひて、
ツミにつき、又、義につき、又、サバキにつき、

世を　あばきつつあらん。
げに、ツミにつき、
それ　彼ら　我を　信じ込み居らざればなり。
では、義につき、
それ　父の許へ、我　戻りつつあり、かつ
汝ら　もはや　我を觀ぬき居らざればなり。
では、サバキにつき
それ　此世の長　さばかれたればなり。

なほ　我　汝らに言ふべき多クの事を有ちつつあり。
されど　汝ら　唯今　ささへつつあり能はず。
で、イツにても、カノ者、眞理の靈　來り給はば、
彼　汝らを　凡ゆる眞理へ　導き入れ給はん。
そは　彼自身より　語らんとしつつあるにあらず。

されど　彼　聞きつつあらんホドの事を、
彼　かたりつつありたまはん。
而して　來りつつあるところの事をば、
彼　汝らに　しらせつつあり給ふべければなり。
カノ者　我を　さかやかしつつあらん、
それ　我ノの中より　彼　受けつつあらん
而して　汝らに　しらせつつあり給ふべければなり。
父の有ち給ふホドの凡テの物は　我ノなり
この故に　我　言へり
それ　彼は　我ノの中より　取りつつあり
而して　彼　汝らに　しらせつつあり給はん　と。
少(時)、而して　汝ら　我を　觀ぬきつつあらず。
また、ふたたび、少(時)、而して　汝ら　我を　見つつあらん。

一七 さるほどに、彼の弟子の中より、彼ら 相互に向ひて、言へり
何なりや？ 彼が 我らに言ひ給ふ所の此事は？
「少(時)、而して 汝ら 我を 觀ぬきつつあらず、
又、再度、少(時)、而して 汝ら 我を 見つつあらん。
而して それ 我 父の許へ戻りつつあればなり」
とは？
一八 さるほどに、彼ら 言ひゐたり
何なりや？ 彼が「少(時)」と言ひ給ふ所の此事は？
我ら 識らず、何を 彼は 語りつつあり給ふか？
一九 彼らが 彼へ 問ひたがり居たることを知り、而して 彼らに
言ひたまへり
それ「少(時)、而して 汝ら 我を 觀ぬきつつあらず、
また、ふたたび、少(時)、而して 汝ら 我を見つつあらん」と
我が 言ひし此事につき、汝ら 相互と偕に あさり居るか？

二〇 まことに まことに、我 汝らに言ふ
それ 汝らは 泣きつつあらん、又、歎きつつあらん。
でも、世は よろこびつつあらん。
汝ら！ 汝らは かなしまされつつあらん。
されど 汝らの悲ミは 喜ビにと 成りつつあらん。
二一 女 イツにても、產まんとする時、
カナシミを もちつつあり、
それ 彼女の時、來ればなり、
でも、イツにても、彼女 小童を うまば、
それ 世にへと、人 生れしとて ヨロコビの故に、
彼女 もはや ナヤミを おぼえつつあらず。
二二 さるほどに、汝ら！
げに、汝らも 亦、今、カナシミを もちつつあり、

でも、ふたたび、我　汝らを　見つつあらん、
而して　汝らの心　よろこばされつつあらん。
而も　汝らのヨロコビをば、
誰も　汝らより　取上げつつあらず、
[二三]而して　カノ日に於て、汝ら　何をも
我へ　問ひつつあらざらん。
まことに　まことに、我　汝らに言ふ
それ　何にても　汝ら　父へ　もとめなば、
彼　我が名に於て、汝らに　與へたまはん。
[二四]唯今まで、汝ら　何をも
我が名において、もとめざりき。
汝ら　もとめつつあれ、而して　汝ら　受けつつあらん。
これ　汝らのヨロコビ　みたされたるモノならばやとてなり。

[二五]此らの事を　タトへに於て、我　汝らに語りたり、
もはや　タトへに於て、我　汝らに
かたるまじきトキの時　來りつつあり、
されど、大膽(オホヤケ)に、父につき、
我　汝らに　のべつつあらん。
[二六]カノ日に於て、汝ら　我が名に於て、求めつつあらん。
而も　我　汝らにつき、父へ　請ひつつあらん。
と、我　汝らに言ひつつあらず。
[二七]そは　それ　汝ら！　汝ら　我を愛慕したればこそ、
かつ　それ　我　父の側より、出で來りしことを、
汝ら　信じたればこそ、
父御自身　汝らを　愛慕しつつあり給へばなり。
[二八]我　父の中より　出で來れり、
而して　我　世にへと　來りたり。

ふたたび 我 世を 辭しつつあり。
而して 父の許へ すすみつつあり。

彼の弟子ら 言ふ

視よ！ 今こそ 汝 大膽に かたりたまふ。
而して 汝 一も タトへを 言ひたまはず。
今こそ 我ら 識る
それ 汝が 凡テの事を 識りたまふことを。
而も 誰か これ 汝へ 問はばやとの
必要をも 汝 もちたまはざることを。
それ 汝 神より 出で來り給ひしことを
我ら コレにおいて、信じつつあり。

彌崇 彼らに答へられ給へり

唯今、汝ら 信じつつあるか？
視よ！ 時 來りつつあり、而も 來りたり。
これ 汝ら 各自 己が物へと ちらさればや、
かつ 汝ら 我のみを のこさばやとてなり。
而も 我は 我のみにあらず、
それ 父も 我と偕に 在したまへばなり。
此らの事を 我 汝らに かたりたり、
これ 我において、平和を 汝ら もちつつあれよかしとてなり、
世に於ては、ナヤミを 汝ら もちつつあり、
されど 汝ら いさみつつあれ、
我！ 我は 世を 制御したり！

第十七章

二八　彌崇　弟子の爲に祈り給ふ（一七の一——二六）

一　彌崇　此らの事を語り、而して　ソの目を　天へ見上げ込みて、言ひたまへり

父よ！　時　來りたり。

汝の子を　さかやかしたまへ、

これ　子も　汝を榮やかさばやとてなり。

二　まさしく　汝　凡ゆる肉の權を　彼に與へ給ひし如く、

これ　汝　彼に與へ給ひたるところの物を、皆を——

彼　トコシへの生命をも、彼らに與へばやとてなり。

三　で、　コレこそ　トコシへのイノチなり——

これ　唯一眞正の神なる汝と

汝が　つかはし給ひしところの彌崇貴德とを

彼ら　知りつつあらばこそとてなり。

四　これ　我が爲すべきぞと、汝　我に與へ給ひたる所の業を完うして、

我！　地の上に、我　汝を　榮やかせり。

五　而も　世の在らぬ前より、汝に添ひて、

我が　有ち居たるところのザカエにて、

父よ！　汝！　今　汝御自身に添へる

我を　汝　さかやかしたまへ。

六　汝　世の中より　我に與へ出し給ひしところの

人に　我　汝の名を　あらはせり。

彼らは　汝の者にてありたり。

而して 汝 我に 彼らを 與へたまへり。
而して 彼らは 汝のコトバを まもりたり。
今や 彼ら 知れり
それ 汝 我に與へしホドの凡テの物は
汝の側よりなり とのことを。

それ 汝 我に與へ給ひしところの詞を
我 彼らに あたへたることと、
また 汝の側より 我が 出で來りしこととを、
彼ら自身 受け、かつ 眞に 知れり。而も、
汝! 汝 我を遣し給ひしことをも 彼ら 信ぜり。
我! 我 彼らについて、請ひつつあり、
世についてにあらず、されど、汝 我に
與へ給ひたるところの者について、請ひつつあり、

それ 彼らは 汝の者なればなり。
而も 我ノなる凡テの物は 汝の物、
而して 汝ノなる物は 我の物なり。
かくて 彼らに於て、我 さかやかされたり。

二 而して 我 もはや 世において 在らず、
而も 此らの者は 世において、在り、
而して 我! 我は 汝の許へ 來りつつあり、
聖なる父よ!
これ 正しく、我らの如く、彼らも 一なれかしとて、
汝 我に與へ給ひたるところの、汝の名に於て、
汝 彼らをも まもりたまへ。

二 我 彼らと偕に、在りたるアヒダ、